

YANAGITUBOKITA—SITE

# 柳坪北遺跡

天然ガスパイプライン(甲府ライン)建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



2002.3

帝国石油株式会社  
柳坪北遺跡発掘調査会

YANAGITUBOKITA—SITE

# 柳坪北遺跡

天然ガスパイプライン(甲府ライン)建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002.3

帝国石油株式会社  
柳坪北遺跡発掘調査会

## 序

本書は、山梨県北巨摩郡長坂町大八田字柳坪に所在する柳坪北遺跡の発掘調査報告書であります。

柳坪北遺跡は、八ヶ岳南麓台地上の標高720メートルの地点に立地しており、1973年、1984年に中央道建設に伴って発掘調査された柳坪A・柳坪遺跡に関わる遺跡とみられています。この付近一帯は歴史性の大変豊かな地域で、縄文時代中期前葉の良好な遺跡である石原田北遺跡や中世の集落として注目されている小和田遺跡など県内でも有数の遺跡が多数存在しています。

今回の発掘調査は、工事の関係上、幅1m、長さ100mというごく限られた範囲が対象でありましたが、縄文時代中期初頭の竪穴住居1軒のほか中期後半の竪穴住居3軒、さらに古墳時代後期の竪穴住居1軒等が検出され、当初予定されたとおりの大きな成果を得ることができました。これらの状況をみると、とくに縄文時代では中期初頭から中期末にいたる期間、一部断絶期もみられますが、一定の継続した集落が形成されていたことが予測され、八ヶ岳南麓における縄文期の大規模集落として、縄文社会の究明に重要な位置を占めることになりました。

また、古墳時代後期の住居からも、ある一定の広がりのものも集落が想定されており、古墳時代における八ヶ岳南麓の開拓のあり方を考えるうえで注目されております。従来から同地域の開発については、平安時代のみ目が向きがちでしたが、それよりかなりさかのぼる古墳時代の開発についてもあらためて検証する必要に迫られているように思います。

長坂町を始めとする八ヶ岳南麓は、旧石器時代以来、中近世に至るまでの数々の遺跡群が密集する地域として全国的にも知られていますが、今回の調査地域である柳坪北遺跡からもほぼ同様な遺構群が確認され、そうした様相がますます鮮明になったわけあります。広大な八ヶ岳山麓での先人たちの歴史の歩みを示すこれらの貴重な成果が今後各方面でご活用いただければ誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の準備段階から本報告書刊行にいたるまで、地元長坂町当局をはじめ事業主体である帝国石油株式会社の各関係各位、また発掘調査や整理作業に携わった多くの方々から多大なご指導やご協力をいただきました。ここに、深甚なる感謝と御礼を申し上げ序といたします。

2002年3月

柳坪北遺跡発掘調査会

会長 萩原三雄

## 例　　言

- 本書は山梨県北巨摩郡長坂町大八田字柳坪625-14ほか所在の柳坪北遺跡の発掘調査報告書である。
- 本調査は天然ガスパイプライン（甲府ライン）建設に伴い、帝国石油株式会社の委託を受けて柳坪北遺跡発掘調査会が実施した。
- 調査会組織および本書作成者は第3章参照。
- 本書の編集、執筆は柳坪北遺跡発掘調査会の責任のもと柳原功一が行った。
- 発掘調査において次の業務を委託した。  
基準点測量・調査区範囲化　株式会社
- 石器石材鑑定では河西学氏（(財)山梨文化財研究所 地質火山灰研究室）にご教示いただいた。
- 本書に関する出土品・記録類は長坂町教育委員会で保管する予定である。
- 発掘調査から報告書作成に至るまでに以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。  
帝国石油株式会社パイプライン建設本部・長坂町教育委員会・三枝興業・守矢昌文・黒尾和久・佐藤勝広・小宮山隆・寺内隆夫・谷口康浩・永瀬史人・閔間俊明・株式会社

## 凡　　例

- 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒、東経138度30分00秒）に基づく座標数値である。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北を示す。
- 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

竪穴 1:60

土坑・埋甕 1:40

全体図 任意

縄文土器（復元） 1:4

縄文土器（破片） 1:4

石器（打斧・磨石等） 1:3

石鎚 2:3

大型石器（丸石） 1:4

- 遺構図版中のドット網かけは焼土を表す。また遺物分布図中の記号は次のとおりである。

・土器 ■石器

- 遺構図版中の遺物接合線については、実線は接合した2点の遺物の接合関係を、また破線は接合しないものの同一個体であることを意味する。

5 石器側面の破線は敲打範囲を、実線は磨り面を表わす。

6 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』（1991年度版）を使用した。

7 遺構図版中の遺物番号は写真図版番号、遺物観察番号と一致している。

8 本書図1は1/200,000地勢図、図2は国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。また図4は『柳坪遺跡』（米田1986）の第2・3回より作成した。

9 本文の註については各節（章）ごと文末に、また参考文献については第7章末にまとめた。

## 本文目次

第1章	調査の概要	1
第2章	位置と歴史的環境	1
第3章	調査に至る経緯と調査経過	4
第4章	調査の方法	7
第5章	層序	7
第6章	検出された遺構と遺物	8
第1節	竪穴建物跡	8
第2節	土坑	10
第3節	埋甕	10
第4節	埋没谷	11
第5節	その他（遺構外遺物）	11
第7章	まとめ	11
第1節	調査の成果と課題	11
第2節	2号竪穴出土土器について—結節縄文をもつ土器を中心に—	14

抄録

奥付

## 挿図目次

図1	柳坪北遺跡の位置	1
図2	遺跡の位置	2
図3	周辺の遺跡	3
図4	柳坪北・柳坪A・柳坪B・柳坪遺跡 全体図	5・6
図5	柳坪A・柳坪・柳坪北遺跡 集落変遷図	13
図6	結節縄文土器（1）	17
図7	結節縄文土器（2）	18
図8	結節縄文土器出土遺跡分布図	19
図9	大泉村姥神遺跡21号住の土器	20
図10	山梨県内出土の中晩期結節縄文土器	20

## 表目次

表1 結節縄文土器出土遺跡	19
表2 土器觀察表	23
表3 石器觀察表	24

## 図版目次

第1図 調査区全体図および断面図	25・26
第2図 1・2号竪穴 遺構	27
第3図 3・4号竪穴、1号埋甕、1号土坑 遺構	28
第4図 7号竪穴 遺構	29
第5図 1・2号竪穴 遺物	30
第6図 2号竪穴 遺物	31
第7図 2号竪穴 遺物	32

第8図 2・3号竪穴 遺物	33
第9図 4・7号竪穴 遺物	34
第10図 1号土坑 遺物	35
第11図 1号埋甕 遺物	36
第12図 遺構外 遺物	37

## 写真図版目次

図版1 調査区近景、1号竪穴	
図版2 2～4号竪穴	
図版3 4・7号竪穴、1号土坑、1号埋甕	
図版4 1・2号竪穴 遺物	
図版5 2号竪穴 遺物	
図版6 2・3号竪穴 遺物	
図版7 3・4号竪穴 遺物	
図版8 1号土坑、1号埋甕 遺物	
図版9 1号埋甕、遺構外 遺物	

## 第1章 調査の概要

柳坪北遺跡は、中央道建設工事で調査された縄文中期後半の柳坪A・柳坪遺跡に隣接して所在する。帝國石油株式会社による天然ガスパイプライン（中府ライン）の建設工事に先立ち、「柳坪北遺跡発掘調査会」が平成13年2～3月に埋蔵文化財の発掘調査を行った。その結果、長さ約100mの間に縄文時代中期初頭の竪穴1軒、中期後半の竪穴3軒、古墳時代後期の竪穴1軒のほか、縄文時代中期後半の土坑1基、埋甕1基が検出された。竪穴群は柳坪A・柳坪遺跡の集落の一一部と考えられ、柳坪A遺跡の集落の広がり、内容をより具体的に示す資料を提示することとなった。とくに縄文中期初頭から中期末にわたり、一部断続期を含むものの長期的に継続した集落であることが予想された。また古墳時代においても一定の広がりをもつ集落の存在が予想され、八ヶ岳山麓の開発史を考える上で興味深い。

## 第2章 位置と歴史的環境

柳坪北遺跡は、山梨県の北西部、長坂町大八田地内に所在する。八ヶ岳南麓台地上の標高720m付近に位置し、現在中央自動車道がすぐ北側を通過する。1973年には中央道建設に伴って柳坪A・B遺跡の調査が行われ、1984年には長坂インターチェンジ建設工事で遺跡調査が行われている。柳坪北遺跡の南側には緩やかな傾斜面が広がり、西側には泉川が南流する。現在、長坂町遺跡分布図では複数の遺跡として分割されているものの（図3）、これらの遺跡群は柳坪A遺跡の広がりとして大きく括ることができると思われる。

長坂町内には200箇所以上の遺跡が登録されており、これまでに中央道建設に伴う調査をはじめ、その後の県営圃場整備事業に伴う大規模な調査で数々の重要な遺跡が発掘されてきた。圃場整備が一段落した近年では、県道、農業試験場用地、ショッピングセンターなどの建設に伴う調査が相次いでいる。

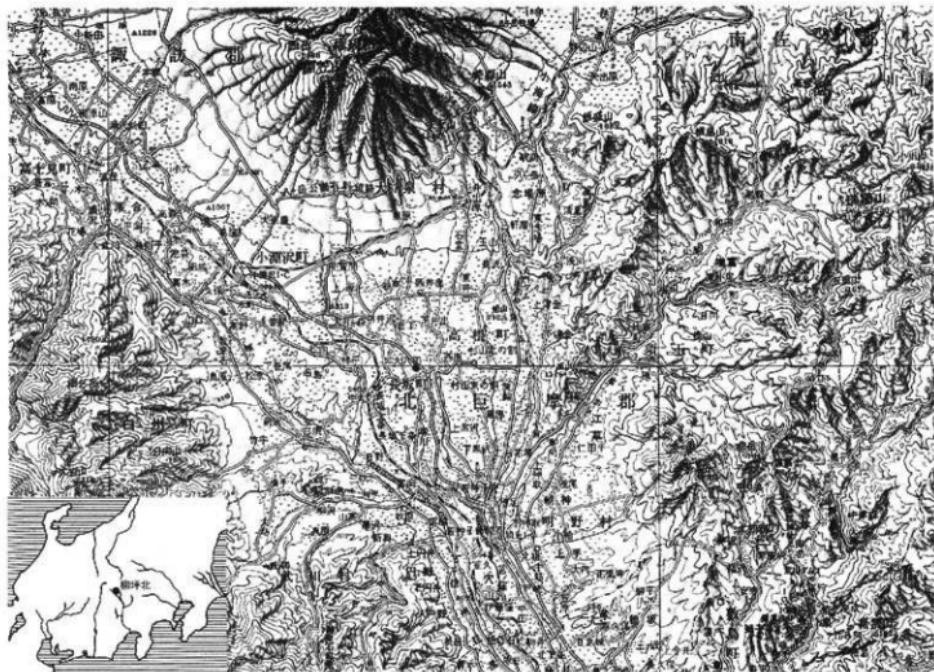


図1 柳坪北遺跡の位置（黒丸印）



図2 遺跡の位置（黒丸白印）

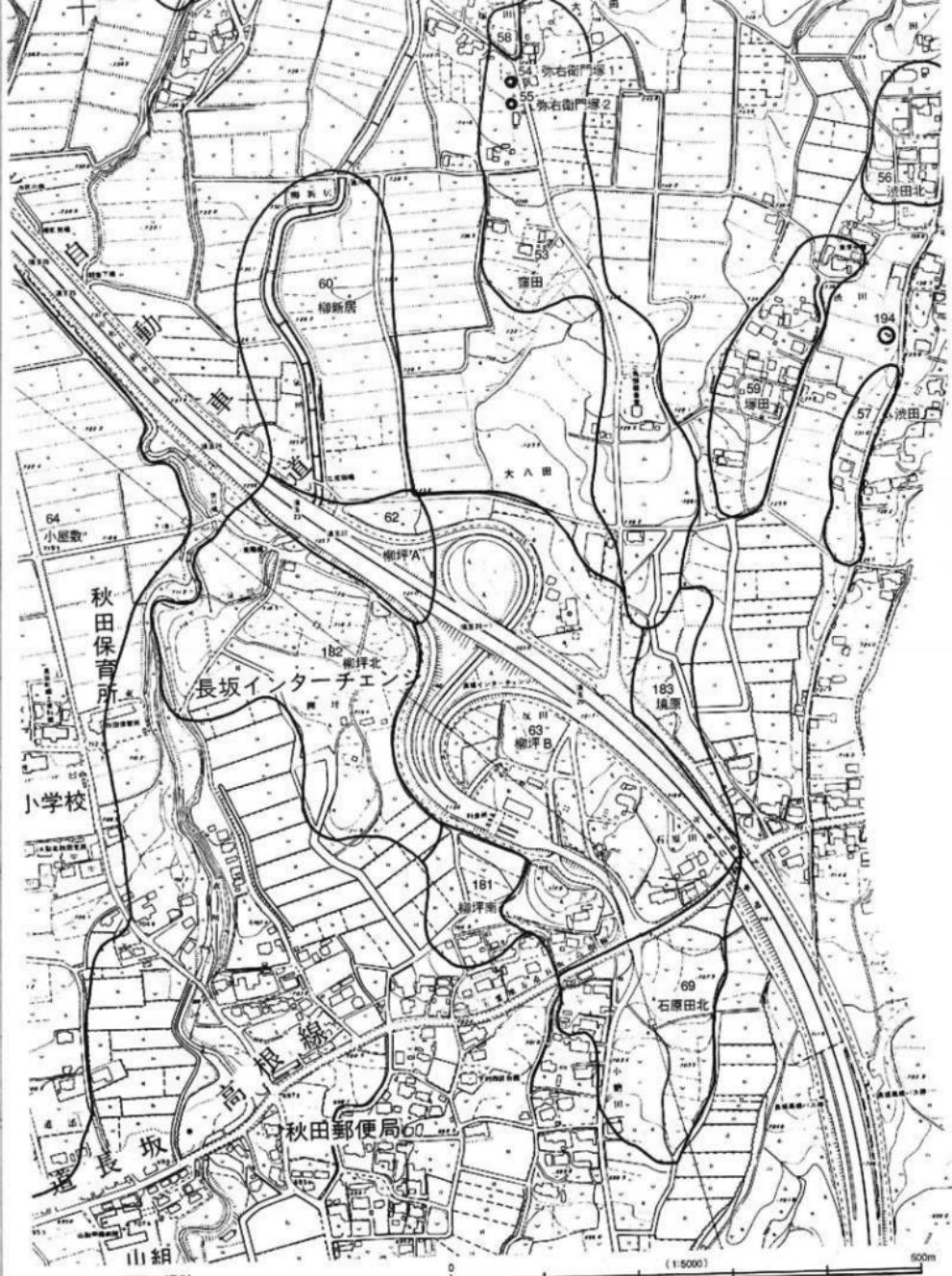


図3 周辺の遺跡

柳坪北遺跡周辺では、まず中央自動車道路線内で柳坪A・B遺跡が調査された（末木1975）。両遺跡は埋没谷をはさんで立地的に分けられている（図4）。

柳坪北遺跡に隣接する柳坪A遺跡では縄文時代中期7軒、古墳時代7軒、弥生時代前期1軒が検出されている。縄文中期は中期前半藤内式期1軒、中期後半曾利Ⅱ式期2軒、Ⅲ式期3軒、曾利Ⅳ式期1軒等で、中期後半が主となる。弥生前期の住居はプランが不明ではあるが、前期後半の条痕土器がまとめて出土している。古墳時代の竪穴は前期1軒、後期6軒で、古墳時代の竪穴が台上地盤で発見されることはそう多くなく、集落単位での調査事例として注目される。

柳坪B遺跡では縄文中期14軒、平安12軒がある。縄文中期は中期後半曾利Ⅲ式期2軒、Ⅳ式期5軒、Ⅴ式期3軒で、曾利Ⅳ・Ⅴ式期に隆盛がみられる。平安時代では9世紀後半～10世紀前半まで継続する中で、10世紀前半で6軒と多い。

1984年の調査では、インターチェンジ予定地内約15,000m<sup>2</sup>が1区から8区に分けられて調査された（米田1986）。そのうち2区の埋没谷以西（仮称西区）は柳坪A遺跡の続き、1・5～7・9区は柳坪B区の続きと思われる遺跡（仮称東区）で、2区の東側と3区（仮称南区）は埋没谷の中洲状の微高地にあたる集落と思われる。また4区として北側の微高地に竪穴1軒がある（仮称北区）。

仮称西区では縄文中期1軒、古墳時代後期1軒がある。縄文中期は五領ヶ台式期1軒、藤内式期1軒、曾利Ⅱ式期1軒、曾利Ⅳ・Ⅴ式期1軒。柳坪A遺跡と合わせると縄文中期11軒、弥生時代1軒、古墳時代8軒である。

仮称南区は縄文中期1軒、平安10軒、平安時代掘立1棟で、縄文中期は曾利Ⅲ式期1軒。平安は9世紀後半～10世紀後半で、9世紀後半3軒、10世紀後半6軒である。

仮称北区は縄文中期1軒（曾利Ⅳ式期）である。

仮称東区は縄文中期3軒、弥生後期1軒、平安18軒、平安時代掘立5棟である。縄文中期は曾利Ⅲ式期1軒、曾利Ⅳ式期2軒。平安時代は9世紀後半8軒、10世紀前半11軒である。柳坪B遺跡と合わせると縄文中期17軒、弥生時代1軒、平安時代30軒である。

また埋没谷内の一帯が8区として調査され、平安時代9～10世紀代の土師器とともに曲面底板、木簡状木製品、板材などの木製品が出土している。

そのほか、柳坪北遺跡周辺では仮称南区の続きと考えられる台地面で柳坪南遺跡が調査され、重複のある平安の竪穴15軒（9世紀後半～10世紀前半）が検出さ

れています（小宮山1997）。以上のほか、やや離れるところ文中期前半、平安、中世を中心に良好な資料を出土した石原田北遺跡（小宮山1999、平野2001）、弥生後期2軒、平安9軒の集落を検出した境原遺跡（1997小宮山）などが存在し、この一帯に縄文中期、平安時代の集落遺跡のほか、八ヶ岳南麓としては珍しく弥生前・後期、古墳時代前・後期の集落遺跡が集中する状況がある。

### 第3章 調査に至る経緯と調査経過

帝国石油株式会社では、昭和30年代以来、天然ガスを主に新潟方面で生産し、東京方面に都市ガスとして供給してきた。平成11年、山梨県内に天然ガス供給を行うためのパイプライン「甲府ライン」の建設が決定され、平成12年から14年に長野県茅野市から山梨県昭和町までの約70kmの区間の予定でハイブリッドの埋設工事を行うことになった。この甲府ラインはおもに中央自動車道の側道を利用して、路面中に幅1m、深さ2.1mの埋設溝を掘削し、深さ1.5m付近にパイプを埋設するもので、帝国石油側は関係市町村に対して平成11年に説明を行っている。

長坂町内では昭和48年の中央道建設工事に伴って柳坪A・B遺跡をはじめ、いくつかの遺跡が調査され、県内でも早くから埋蔵文化財調査が着手されてきた。また昭和59年の長坂インター建設の際にも遺跡調査が行われ、インター周辺での濃密な遺跡群の存在が判明している。さらに町誌編纂事業にともなって行われた町内全域での詳細分布調査では、遺跡の分布状況が明らかとなった。それらのデータにもとづき、長坂町教委ではパイプライン埋設事業に向け、柳坪北遺跡地内における本調査の必要性を指摘した。

その指摘を受け、平成12年秋、帝国石油より（財）山梨文化財研究所に調査依頼があった。そこで（財）山梨文化財研究所では「柳坪北遺跡発掘調査会」を組織して委託契約を締結し、本調査を行う運びとなった。なお、調査会には長坂町教育委員会職員に参与として加わっていただき、さまざまな指示を仰ぐとともに、帝国石油・柳坪北遺跡発掘調査会・長坂町教育委員会の3者間で「長坂町柳坪北遺跡埋蔵文化財に関する協定書」を交わし、調査全般にわたり地元教育委員会の指導を受ける体制とした。

#### ＜柳坪北遺跡発掘調査会組織＞

会長 萩原二雄（（財）山梨文化財研究所 所長）

副会長 鈴木 稔（ 同 研究室長）

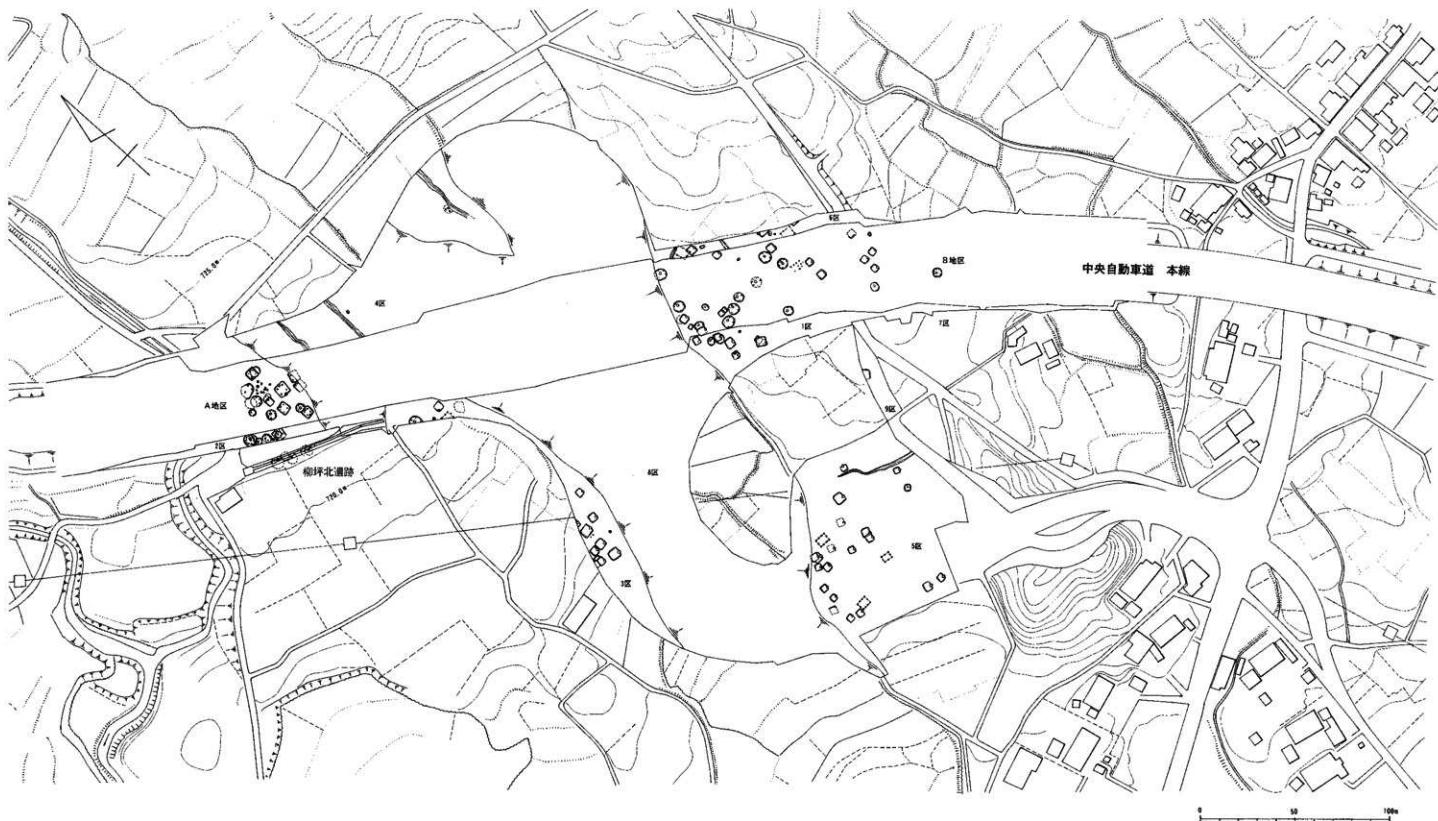


図4 柳坪北・柳坪A・柳坪B・柳坪遺跡 全体図

参与 村松佳幸（長坂町教育委員会 文化財担当）  
調査員 横原功一（（財）山梨文化財研究所 研究室長、  
　　調査担当）  
調査員 宮澤公雄（　　同　　研究室長）  
調査員 平野修（　　同　　研究室長）  
事務局員 五味芳子（　　同　　事務主任）

＜発掘調査参加者＞（順不同、敬称略）

井手正美、井手研二、吉本勝美、福井光幸、村田せつ子、奥水和彦、西田貞雄、戸野久子、三井幸子、遠藤勝、笠井いさは、小林美雪、根岸利昭、吉田香代子、望月和仁、村田矩夫、井部利春、辻畠圭亮、初鹿野博之、柳沢哲哉

＜整理作業参加者＞（順不同、敬称略）

佐野靖子・小林小路・H中真紀美・保坂真澄・須田泰美

＜調査日誌抄録＞

平成13年（2001年）

1月19日（金）

調査予定地内の水道管の位置確認のため、重機による試掘が行われ、教育委員会担当とともに現場に立ち会う。3箇所に深掘りを行い、調査予定地の東側約半分は埋没谷であることが推測された。

2月13日（火）

ハウス・トイレほか、器材搬入、設置。重機による掘り下げを東端から開始。午後から作業員動員。

2月14日（水）

重機による表土剥ぎ終了。西側で竪穴状の落ち込みを確認。確認面は非常に堅くなっている。

2月19日（月）

1号竪穴設定、調査開始。炭化材・焼土を伴う火災住居であることが判明。

2月20日（火）

1～3号竪穴掘り下げ。谷部の掘り下げ継続。谷部からは中期後半の小破片が多く出土する。

2月23日（金）

1号竪穴設定。一部拡張して完存する石窯炉を検出。西端の搅乱部分にトレーニングを入れる。

2月25日（月）

埋甕が出土し、5号竪穴を設定する（整理段階で住居ではなく単独埋甕に変更）。2号竪穴（中期後半）は遺物が多く、出土地点を実測しながら掘り下げを継続。3～5号竪穴の写真撮影。

2月27日（火）

西側の搅乱状の落ち込みを仮に6号竪穴とする（整

理段階で抹消）。

2月28日（水）

2号竪穴内で石窯炉が見つかり、炉の分だけ拡張する。

3月8日（木）

7号竪穴確認。炉石の一部が壁面から見つかったので、急きよ拡張し、図化作業をあわただしく行う。また炉石には番号を振り、とりあえず研究所敷地内へ移設することとした。現場での作業は本日ですべて終了し、道具類の片付け、撤去を行った。

## 第4章 調査の方法

調査区が側道の路面上のため、作業の手順としては、まず埋設溝1m分のアスファルトを切った後、重機を入れ、土層を観察しながら側道工事に伴う砂利や埋め土を除去し、さらに遺物包含層まで重機で土を除去した。その後、人力で遺構確認面の褐色ローム面まで掘削し、遺物が出土した場合には平板実測、レベルによる計測を繰り返した。遺構確認後、個々の遺構を掘り下げる。土坑・埋甕・炉については半蔵し、セクションを記録した。また竪穴の集中する地点、および埋没谷については南壁面でセクションを通して実測した。調査区北端は埋設パイプが河川を横断するため幅広に調査したが、著しい搅乱のため遺構ではなく、遺物を回収するにとどまった。

なお、実測にあたっては道路面上に任意に平板ポイントを複数設置して平板測量による図化作業を進め、後で基準点測量と調査区範囲測量を業者委託して平板圖を重ねた。

側道は盛り土箇所が多く、作業にあたっては上留めによる崩落防止対策、夜間や休日におけるネットによる転落防止対策など、通常の発掘現場にはない各種安全対策が求められ、事故が起こらないように細心の注意を払って作業が進められた。

## 第5章 層序

側道下部は、厚さ6～8cmのアスファルト層下に35cm程度の碎石層があり、直下は旧农土（畑の耕作土）の黒褐色土、または側道造成時の盛土層、あるいは遺構覆土となっている。いずれにしても道路工事の際の填圧を受け非常に堅くしまっている。その下層は、浅いところではわずか数cmで遺構確認面としたローム面となる。

埋没谷の土層については第1図中に記載したとおり

で、深いところで90cmの堆積があり、黒褐色土、暗褐色土を主とした覆土をもち、最下層は黒褐色～黄褐色土となる。埋没谷以外では竪穴などの遺構部分を除き、確認面までは全体的に非常に浅くなっている。

調査区東端から西へ12mまでの範囲は、断面観察によって埋没谷掘り方直上に盛りをした形跡があり、柳坪遺跡の全体図との重ね合わせによって、1984年の調査区内であることがわかった。また調査区西端の5×4m幅で掘削した部分は、全体に擾乱が激しく、おそらく側道工事の際に地山中の礫を埋めた擾乱坑と判断された。

## 第6章 検出された遺構と遺物

### 第1節 竪穴建物跡

1号竪穴（位置）調査区西側、2号竪穴の東隣り。（重複）西側は2号竪穴の東壁付近と重複し、東側は7号竪穴と重複する。（覆土・検出状況）黒色の覆土を確認。覆土の厚さは約20cmと薄い。床面上に中央付近から東壁にかけて炭化材が散在する。また東壁から北側に薄い焼上がりが広がっていた。（形状・規模）東西4.1mの推定隅丸方形プラン。南北側は調査区外のため未調査。主軸方向はN-23°-W。（遺物出土状況）床面上から破片がわずかに出土した。また1号ピット内上層から、頭部へ口縁部にかけて全周する要がやや斜位の正位状態で、口縁部を床面上に一部出した状態で出土した。（床・ピット）床面は平坦で、全体的に堅い。中央南壁寄りの東西方向に柱穴と思われるピットが3本直線的に並んでいる（2～4号ピット）。2号ピットは径13cm、深さ22cm。3号ピットは径18cm、深さ28cm。4号ピットは径15cm、深さ12cm。2・3号ピットは規則的に対と考えられ、東・西壁からそれぞれ約1.2m離れている。両者の間隔は約1.6mである。1号ピットは南壁東寄りにあり、東西径58cm、深さ52cm。全形をつかんでいないものの、隅丸方形かと思われる。同時期の類例として柳坪A遺跡7号住があり、南壁中央（龕の対面）壁に接するように方形貯蔵穴があり、東南柱穴のコーナー寄りの床面にも方形貯蔵穴が存在する。1号ピットは7号住の後者貯蔵穴と位置が同じであり、貯蔵穴の可能性のある屋内施設であろう。上層出土の甕口縁部は偶然の混入、あるいは貯蔵穴に関連したものであろうか。なお、1号ピット北側には3・4号ピットが存在し、両ピットは溝でつながっている。また溝は1号ピットを囲むようにやや弧を描いている。また溝と1号ピット間に地上手状に掘り残した床面の低い盛り上がりが見られる。溝と土

手は貯蔵穴にかかる間仕切り状の施設と思われる。（龕）なし。おそらく北壁に存在するであろう。（壁溝）不明確である。ただ東壁・西壁ともに小ピットが連なる浅い壁溝状を呈す。（龕）東壁は高さ約20cmできつて立ち上がり、西壁は2号竪穴との重複のため、約5cm程度確認されるのみである。（その他の施設）1号ピットは貯蔵穴か。（遺物）1は6世紀前半代と考えられる上師器壺。外面に薄く赤彩が残る。2は1号ピット出土の甕、胴は丸く膨らみ、やや古朴を残し、5世紀第4半期と考えられる。3は周縁にほぼ全周する敲打痕をもつ磨り石。繩文の可能性が強いが、本竪穴の時期の可能性もある。4（四石）・5（石鎌）は繩文期の所産。（時期）鬼高式期、6世紀前半（第4半期か）。

2号竪穴（位置）調査区西側。1号竪穴西側。（重複）1号竪穴に東壁を切られる。（検出状況）1号竪穴の西壁を掘り進める過程で繩文土器片が多く出土し、繩文時代の竪穴が予想されたので、西壁を確定し、竪穴の範囲を把握した。遺物を取り上げ、柱穴と炉を確認した段階で北側調査区外へ西側の柱穴および炉石が壁面にかかっていたため、一部拡張して調査した。（形状・規模）東西幅6.3mを調査したが、おそらく推定東西長7.5mの円形プランで、やや大型の部類の竪穴と考えられる。2本の柱穴（1・2号ピット）は奥壁側の主柱であり、その中に炉が位置する。（覆土）約30cmの厚さで遺存する。（遺物出土状況）炉東側を中心に、覆土上層から床面上にかけて比較的多量の遺物が出土した。（床・ピット）小ピットが多数分布するため、床面の遺存状況は悪い。明確な硬化面はない。柱穴は3箇所ある（1～3号ピット）。1号ピットは径60×70cm、深さ74cm、2号ピットは径84×80cm、深さ72cm、3号ピットは径72cm、深さ56cm。3号ピットについては西壁が袋状で、貯蔵穴かもしれない。1・2号ピットにはそれぞれ段差が付属するが、建て替えに伴う柱穴とは異なる。（炉）掘り方の東西幅1.3m、深さ40cmの切り炬燵状の方形石壠炉。北辺側の炉石のみ原位置を保っている。炉石は幅90×55cm、厚さ10cmの安山岩鉄平石で、炉内覆土の1層が堆積する面から25cmの高さまでは被熱によって薄く赤変している。炉の深さで底面から約30cmの高さまでである。なお炉石をはずして覆土を除去したところ、炉石裏側から凹石（31）が出土した。炉裏に埋められた理由は不明である。覆土中には焼土粒がみられたが、焼土層はとくにない。底面中央付近がわずかに被熱赤変していた。炉内からは結節繩文をもつ小型深鉢片が出土し

(9)、3号堅穴出土例と接合関係にある。(堅溝) 西壁でやや不明確な壁溝が検出されているが、壁溝としては確実ではない。(盤) 西壁のみ検出。深さ43cmで、非常に緩やかな傾斜面である。(その他の施設) なし。(遺物) 6は口縁～頸部に縦文、胴部下半には縱方向に短沈線の列点文(刺突文)を充填する。口縁部には2本隆線で溝巻きつなぎ文を貼付し、隆線間に縦に刺突文を連続する。胴部には2本の沈線でHの字状モチーフを描き、交差点には渦巻文を描く。7は結節繩文をもつ深鉢で、II縁部は2本隆帶によるやや低平な溝巻きつなぎ文があり、横円区画内を縦に条線で埋める。渦巻き文から垂下するように、繩文地文の上から縦に結節繩文が施文される。8は紐縄文土器で、口縁部は斜行沈線文である。9は7と同じく結節繩文土器で、口縁部に2本隆線によるつなぎ文を貼付し、区画内には縦の沈線文で埋める。胴部は隆線のつなぎ部から垂下するように結節繩文を施文している。10は口縁部文様帯ではなく、Hの字状沈線文内を矢羽状沈線文で充填している。11も10に似たモチーフをもつ。口縁部文様帯ではなく、頸部以上を無文とし、胴下半を縦に沈線で区切った上で綾杉状沈線文を埋めている。12は肥厚唇口縁をもつ上器。13は有孔鉢付上器で、胴部のモチーフは2本の低隆帶による横S字状で、押し引き(角押文)による刺突文で充填する。19は2本沈線による連弧文。21・22は同一個体で、縦の短沈線を地文としたおそらくX把手深鉢形土器。23・24も刺突文土器である。27・28は打斧、29~33は凹石、34は簞齒状側縁の石鎌。(時期) 曽利II b期(櫛原1999)。

3号堅穴(位置) 調査区西側。7号堅穴東側、4号堅穴西側。(重複) 東側約半分が4号堅穴に切られる。(検出状況) 3・4号堅穴付近は埋没谷の延長として黒褐色～褐色土の覆土として確認された。4号堅穴の石囲炉とは別に焼土を作り埋甕炉(炉体土器)が南側壁際に検出されたため、埋甕炉が帰属する堅穴を3号堅穴とした。(形状・規模) 4号堅穴(曾利I式期)が大きく重複するため、3号堅穴は東西3m程度が調査された。炉が堅穴中央付近に位置すると考えると径4m程度の円形堅穴であろう。(覆土) 約30cmの厚さの覆土が遺存する。(遺物出土状況) 10cm大の礫がやや多く分布し、五箇ケ台式期の土器片がわずかに伴っている。礫・遺物はほぼ床面上である。(床・ピット) 全体にやや軟弱。明瞭な硬化面はない。柱穴は明確ではないが、炉の北東1.2m、4号堅穴内に径23cm、深さ50cmのやや細い柱穴がある。本堅穴に伴うものと考えておきたい。(炉) 深鉢形土器口縁部を埋設した埋甕炉。

土器は全周せず、北側に25cm程度遺存するのみである。当初から破片のみであったとは考えにくく、重複する4号堅穴の堅付近に切られ、抜かれたと考えるのが自然である。上器周辺がわずかに被熱して焼土化している。炉の掘り方は径65×60cm、深さ30cm。(堅溝) なし。(盤) 西壁のみ残り、高さは15cm程度。ややきつく立ち上がる。(その他の施設) なし。(遺物) 36は炉体土器。口縁部がくの字に屈曲した深鉢口縁部で、口縁部に竹管文、竹管押し引き文が施文される。37は張り出しがみの底部。38はII縁部で交互刺突文がつく。39は深鉢頸部で、縦の竹管条線文、屈曲部には竹管押し引き文をもつ。40は打斧、41・42は石鎌。(時期) 五箇ケ台II式期。古～中段階(今福1999a)。

4号堅穴(位置) 調査区西側、3号堅穴の東隣り。(重複) 内側で3号堅穴を切る。東側には1号埋甕があり、本堅穴とは明らかな時期差があることから、埋甕を伴う堅穴の可能性もある。当初、埋甕を堅穴にともなう屋内埋甕と考えて5号堅穴としたが、整理段階で欠番としている。(検出状況) 3号堅穴付近を掘り下げていく過程で石囲炉の一部を検出し、南側調査区外に続いていたため、急きよ炉の幅で拡張し、炉全体を完掘した。東側には棗集中箇所があるが、南壁セクションによれば棗部分は上層からの掘り込みを示し、本堅穴よりも後出することは明らかである。また炉北東側には、炉に接近して1号土坑が位置する。土器の型式から炉内の土器と土坑櫛土内の土器は同一型式で、同時期と考えられることから、堅穴内土坑(貯蔵穴)と思われる。床面は不明確で、東側の埋没谷に向かって地山が傾斜するため、炉石がやや浮く状態まで床面を下げた。(形状・規模) 壁は不明確である。3号堅穴との境は本堅穴の炉と3号堅穴の炉の間に斜めに入るわずかな段差を想定した。想定壁の延長線上にあたる3号堅穴の炉体土器は、ちょうど4号堅穴側の東側が抜かれている。炉石の向きから南西方向が主軸線と思われるが、炉が西壁に寄りすぎていることとなる。主軸方向が南東向きであるとも考えられ、その場合は西壁が奥壁となる。堅穴の推定径は不明であるが、小さく見積もって径3~4m程度であろう。(覆土) 炉石上面まで約20cm。完掘床面を掘り方とみなすと深さ40cmである。(遺物出土状況) 炉内・1号土坑内を除き床面にはこれといった遺物はない。(床・ピット) 床面は不明確。柱穴も確実なものはない。(炉) 7個の平石を平置きで方形に組んだ石囲いが。炉の主軸方向は、炉石の配石状況からN~52°~Wと思われる。つまり側面に長い棗を1個ずつ置き、奥壁側に2個の中型の棗を

置く。手前側には中型縦2個とその間に1個の小型縦を置き、中心を示しているように見られる。炉内には炉底に土器内面を上にするように主に2個体からなる深鉢、鉢片が敷き詰められていた(43・44)。上層には43があり、その直下には44がある。炉内は上器の直下あたりが底面と考えられ、浅くくぼむ程度の掘り込みを持つものであったらしい。覆土中、底面とともに焼土はほとんどない。こうした状況から、上器敷炉として、もともと上器片を敷き詰めた状態で炉が使用された可能性がある。その場合、焼土は土器片上に堆積するか、清掃によって片付けられてしまったものと考えられる。上器は炉(竪穴)の使用時期を示すものとなる。土器片をがの機能喪失後の何らかの処置と考えることも可能で、竪穴廃棄時に炉の機能停止を示す意味で破片を棄棄したとする見方もできる。ここでは前者が有力と考えておきたい。(壁溝) 西壁とした段差付近に壁溝らしき断続的な小ビットが存在する。(壁溝) 西壁が壁とすると、床面までは数cmの深さである。(その他の施設) 1号土坑は貯蔵穴か(後述)。(遺物) 43・44・46は炉内出土。45は炉の上層出土。43は縦目条線地文土器で、頸部・縦の垂下文・懸垂文に半截竹管文による押し引き文を施文する。施文順序は陰線後に条線を施文する。44は縦文地文の鉢。46は刻み降線をもつ長絞繩タイプの深鉢頭部片で、小把手をもつ。48は3号竪穴からの混入か。(時期) 曽利I a～b式期。

7号竪穴(位置) 調査区西側。1号竪穴の東隣り。(重複) 1号竪穴に西側半分近くを切られる。(検出状況) 1号竪穴と3号竪穴間は当初造構がないと見られていたが、南壁の断面観察に伴なって精査した際、柱穴と思われるビットが検出され、また1号竪穴寄りの壁際から並んだ小石が数個検出された。炉石の可能性があると判断し、南側へ炉の幅で拡張していったところ、長方形石窯炉の全形を検出することができた。また炉北側に柱穴を想定し、床面の精査をしたところ、奥壁側と思われる柱穴1本を検出し、また南壁ぎわで最初に見つかった柱穴を結ぶようにわずかな段差も存在したため、竪穴の壁が判明した。(形状・規模) 検出した竪穴の幅は東西3.3m程度であるが、本来は径5.6m程度の円形プランであったと考えられる。炉は北側、奥壁寄りに位置する。炉と奥壁柱穴(3号ビット)の位置関係から主軸方向はN-14°-Eである。(覆土) 数cm～15cmと薄く、ほとんどない状態である。色調は黄褐色土で、地山に近い。(遺物出土状況) 1号ビット内からミニチュア土器(50)が出土しただけで、ほかには皆無である。(床・柱穴) 床面は硬化面がないが、側道

工事の際に填土を受けて全体に非常に堅くしまっている。柱穴は3本で、1号ビットは径50cm、深さ54cm。2号ビットは径50cm、深さ40cm。3号ビットは径65×50cm、深さ75cm。1号ビットと2号ビットの位置関係は建て替えを示すものかどうかはわからない。(炉) 135×85cm、深さ15cmの長方形石窯炉。炉内中央付近が薄く被熱し、焼土化している。炉石は西側の一部を欠失する。主軸方向はN-9°-E。手前側には長方形のやや大型の平石を平置きで据え、右側辺には5個、奥壁側には3個の小礫を連ねるように平置きする。(壁溝) 壁溝はない。ただ2号ビットと3号ビットをつなぐように溝状の小ビット列が出ており、中期前葉～中葉にみられる駆駆のベッド状造構をくくる溝ではないかと見られる。(壁) 造構外との段差はわずか数cm。(その他の施設) なし。(遺物) 1号ビット覆土出土のミニチュア土器(50)のみ。(時期) 土器がほとんどないことから時期判定は難しいが、炉形態から曾利I a式期か。

## 第2節 土坑

1号土坑(位置) 調査区西側、4号竪穴内。(形状・規模) 径約80cm、深さ45cmの円形で、断面形は鍋底状を呈す。(覆土) 痞褐色土主体。(遺物出土状況) 2層上層からやや多くの土器片、下層から数個の礫が出る。(遺物) 51から56はいずれも長脚斐形の深鉢。51・52は非常によく似た無文II縫部。53・54は縦目条線地文で降線上にヘラ刺突によるキザミを入れる。55は無文地にキザミ隆線を垂下する。56は頸部文様帯にあたり、区画内に沈線文を施文する。57は打斧。58は土坑下層から出土した花崗岩製の台石で、表面は滑らかに磨られている。風化が著しい。

## 第3節 墓壙

1号埋甕(位置) 調査区西側の1号竪穴東側。調査時点では5号竪穴として竪穴住居内の埋甕と想定したが、幅1mという規制のため、屋外、屋内の判断ができるず、とりあえず屋外の単独埋甕扱いとした。(形状・規模) 底部打ち抜きしたX把手付深鉢を正位埋設する。口縫部は無文帯の部分が同じ高さで欠失し、別個体の口縫部片を埋甕の割れ口外側に添えるように配置してあった。底部は穿孔ではなく、内側から棒状のもので突いて抜いた状況を呈し、底部外側に剥離痕が広がっている。また底部の破片は底部直下に細片化して存在し、埋設後に打ち抜いたことがわかる。埋甕の掘り方は径約40cm、深さ28cm。また東壁に埋甕から10cmほど離れて、丸石と考えられる花崗岩の風化礫が存在す

る。縄の下面と埋甕上端のレベルはほぼ一致し、その面が本来の埋甕の掘り方であったと思われる。(覆土)暗褐色土。(遺物出土状況)埋甕内中位から打斧片が出土した。(遺物)59は埋甕。口縁部以外は完存し、頸部に4単位のX把手、肩部には1本の低峰帶による溝呂き文をもつ。低峰帶は両脇がナデ沈線で縁取られ、峰帶間は柳条線で充填される。上器は内面に薄い黒変部、外面胴下半に赤変部が認められ、通常の煮沸川土器を転用したことがわかる。60はおそらく埋甕と同形式のX把手深鉢の無文口縁部で、当初調査時には同一個体の口縁部を割りとて割れ口の周間に配置したのではないかと考えたが、胎生がやや異質で怪があわないこと、60と61の間に接合する接点がまったくないことから別個体と判断するに至った。62は丸石。現状では風化がきわめて著しく、丸みを失っている。埋甕との出土位置からすると、なんらかの関連性があるものと考えられる。埋甕が竪穴内の出入口部に伴うものであれば石棒、立石を添える事例があり、本例もそうした類例のひとつかと思われる。本例が屋外の単独埋甕であるとした場合、埋甕のそばにそうした特徴的な石を添える事例があるかどうかは定かではない。花崗岩は1号土坑内からも台石が出土しているが、長坂町を含めた八ヶ岳南麓台地上には本来存在しない巖である。釜無川方面からの搬入巖と考えられる。

#### 第4節 埋没谷

東端から約40m分までが埋没谷である。調査区東端から12m分は、調査時の断面観察で埋め上であることが予想され、整理時点で図面を重ね合わせたところ、1983年の柳坪遺跡調査時に2区の一部としてすでに調査済みであったことが判明した。したがって、その間での遺物の出土はほとんどない。

東端から10~40m分、幅約25mの埋没谷内の全出土土器片の出土位置を、第1図にドットで示した。土器は全域から出土するのではなく、幅5m程度の範囲に集中している。出土層位は4層から5層の黒褐色土層で、地表下1.2m、谷の深さ0.7m、包含層の埋土厚は約30cmである。土器の出土位置は、断面図に投影すると帶状に連続しているが、必ずしも層位とはうまく対応していない。土器は3~5cm大の小破片が半で、大きくて10cm程度の破片である。とくに水流で磨耗した様子はない。土器のほか、石器には黒曜石のチップ類はあるが、製品はない。

土器の取上げ点数は計301点で、うち116点が時刻判別可能であった。中期初頭、五領ヶ台式~曾利V式、古墳時代鬼高式が認められ、内訳は五領ヶ台式6点、

裕沢式1点、新道5点、藤内7点、井戸尻4点、曾利I2点、曾利II48点、曾利III19点、曾利IV13点、曾利V6点である。中期後半の上器片が多く、中でも曾利II式が突出した状況を示す。周辺の竪穴との比較では、おおむね竪穴が存在する時期の土器が埋没谷にあり、集落の盛行期である曾利II式期に上器量が最も多いのは駆除穴と相関した現象といえる。ただ竪穴のない猪沢、新道式期にも存在することから、他時期同様、未調査区に竪穴が存在する可能性があるといえる。土器型式の新旧と出土位置の上下関係は必ずしも正しくなく、層位的に堆積した状況とはいえない。

曾利II式に関しては、確認した48点中、7点が結節縄文をもつ縄文地文土器であった。2号竪穴で復元陶体2点が出土していることから、本遺跡にはかなりの結節縄文土器が存在したと考えてよいだろう。集落が環状を呈すとみられるこの時期に、集落からみると東側にある埋没谷内が上器捨て場として利用されたと考えられる。ただし、他遺跡の土器捨て場と違い、大型破片がほとんどないことから二次的な堆積という印象を受ける。

#### 第5節 その他(遺構外遺物)

2号竪穴西から西端にかけては、ほとんど搅乱を受けた状況であった。中央道側道工事の際か、あるいはそれ以前の段階で搅乱されたものと考えられ、重機等で深掘りして巨礫を埋めている。そうした礫に混じって土器片が多数出土した。本来は駆除穴等の遺構が存在したと考えられるが、遺構の痕跡は認めることができなかった。出土遺物は中期後半の土器・石器で、67の釣手上器片などがある。なお、当初2号竪穴西側の落ち込みを6号竪穴として調査を進めたが、整理段階で欠番とした。

## 第7章 まとめ

#### 第1節 調査の成果と課題

今回の調査は幅1m、長さ約100mのトレーン調査である。側道中央の調査であったため、果たして遺構が残っているだろうか、また1m幅程度の調査で遺構が把握できるだろうかと心配もした。しかし側道工事の填土を受けて非常に堅くしまり、覆土も和専削られていたものの、遺構面はかろうじて欠失せずに遺存していた。

調査区からは竪穴5軒と土坑、埋甕、埋没谷が検出された。先に実施された中央道木線部分の柳坪遺跡、およびインター工事の柳坪遺跡2区の調査を参考にす

れば、今回の調査内容もある程度は予想されたものといえる。

調査の結果、わずか1m幅にもかかわらず、予想以上の濃密な遺構の集中が判明した。また、これまでの柳坪A遺跡、柳坪遺跡の調査成果に今回の柳坪北遺跡が加わったことで、遺跡名がさまざまに呼称されてきたこれらの遺跡は、後述するようにともと同一の集落の広がりとして捉えていかねばならないだろうと考えられる。

柳坪A遺跡は曾利式土器分布圏の中心が山梨にあることを最初に推測せしめた学史的な遺跡である。しかし調査範囲の制約から集落構造は明確にはなっていない。今回の資料を追加してもなお資料不足の感が否めないものであるが、これまで本線幅で限定的に理解してきた集落範囲が、実は大きく南側へ展開していることが予想されるのである。これは縄文中期に限らず、古墳時代集落にもいえる。

あらためて個々の遺構を見ていくと、柳坪北遺跡からは縄文中期初頭（五領ヶ台式期）1軒、中期後半前葉（曾利I式期）2軒、中期後半（曾利II式期）1軒、古墳時代後期1軒が検出された。柳坪A遺跡・柳坪遺跡2区でこれまでに発見された遺構数と合計すると、縄文中期は初頭の五領ヶ台式期2軒、前半の藤内式期2軒、中期後半の曾利I式期2軒、曾利II式期4軒、III式期3軒、曾利IV式期1軒、曾利V式期1軒、弥生時代前期1軒、古墳時代後期9軒である（図5）。また上坑は計11基程度があり、縄文中期の土坑は見かけ上、土坑集中部を形成している。

五領ヶ台式期ではII式期の竪穴2軒があるが、両者にはわずかに時間差がある。柳坪北3号竪穴（五領ヶ台II古～中）は口縁部付近の破片を埋めた炉体土器をもち、プラン、柱穴配置については不明であった。柳坪2区9号住（五領ヶ台II新）は径4.1mの円形プランと推測されるものの柱穴、炉は明確にされていない。

裕沢式期では竪穴は未確認であるが、柳坪A地区の土坑集中部から土坑1基が検出されている（9号上坑）。

藤内式期には竪穴2軒（柳坪A4号住、柳坪10号住）、土坑2基（2・12号土坑）がある。土坑はともに土坑集中部にあり、竪穴の配置との関連性がうかがえそうである。

曾利I式期では柳坪北遺跡のみから2軒検出されている（柳坪北4・7号竪穴）。井戸尻式期の竪穴がないので、藤内式期とは断続期間を経て、柳坪北遺跡を中心新たに竪穴が出現したと考えられる。2軒の炉形態はそれぞれ異なり、4号竪穴では多数の平石を方形を意識して平置きにした浅い炉で、中期中葉からの系

語がうかがえる。類例としては高根町社口遺跡30・31号住などがある。炉内には土器片が敷かれ、土器敷かと考えられる。一方、7号竪穴は小縦を主に長方形に並べた浅い炉である。曾利I式期でも甲府盆地東にはほとんど分布せず、八ヶ岳西南麓に多く見られる炉形態で、小型の埋甕炉を内部に設置することがある。県内では社口遺跡32号住、甲ツ原20号住例がやや長方形化した炉である。4号竪穴と7号竪穴の両者の炉形態は大きく違うことから、時間差、あるいは同時期であれば地城差が予想されるところである。社口遺跡では、出土した井戸尻Ⅲ～曾利I式土器を4細分する中で、31号住は1・2段階に、32号住は3・4段階に位置づけられており、4号竪穴的な炉が7号竪穴的な長方形炉に先行することが予想されている。柳坪北遺跡では7号竪穴に伴う土器がないため、7号竪穴の時期も推定にすぎないものの、一応時間差があるものと想定しておきたい（註1）。

曾利II式期では竪穴4軒がある（柳坪A1・2号住、柳坪6号住、柳坪北2号竪穴）。柳坪A遺跡から柳坪北遺跡にかけて集落域が広い面積を占めるようになり、一応、弧状の配置を示す。集落が埋没谷側に向かって展開するよう見え、集落としてのまとまりが認められる。ただ、曾利II式期も一般的には2細分が考えられているので、時期細分していく場合には竪穴の配置も分解されることになる。

曾利III式期では竪穴3軒があり（柳坪A6・8・10号住）、曾利II式期の集落域を踏襲する。同時に埋没谷をはさんで東側台地にも竪穴が見られるなど、集落域の拡大が指摘される。

曾利IV式期では竪穴1軒のみとなり、集落としては衰退する。そのかわりに本時期から次の曾利V式、中期末にかけて埋没谷東側、柳坪B遺跡で竪穴軒数が増加し、拠点が移動したかの印象を受ける。

曾利V式期も竪穴1軒のみである。

このように縄文時代では中期初頭から末まで断続的ながら竪穴が存在し、中でも曾利II～IV式期に隆盛をみせるが、竪穴は各時期1～3軒程度と少なく、定型的な環状集落からはほど遠い。柳坪A遺跡の土坑分布から中期前半での土坑集中部の形成が想定されるものの、対応する竪穴配置が明確ではない。また中期後半では土坑域の形成が認められない。

弥生前期、奈良文期には竪穴と考えられる居住施設が1軒ある（柳坪A16号住）。県内で、この時期の竪穴の検出例はきわめて少なく、居住形態、集落構造は依然不明確のままである。

古墳時代、前期に柳坪A遺跡に竪穴1軒がある（3

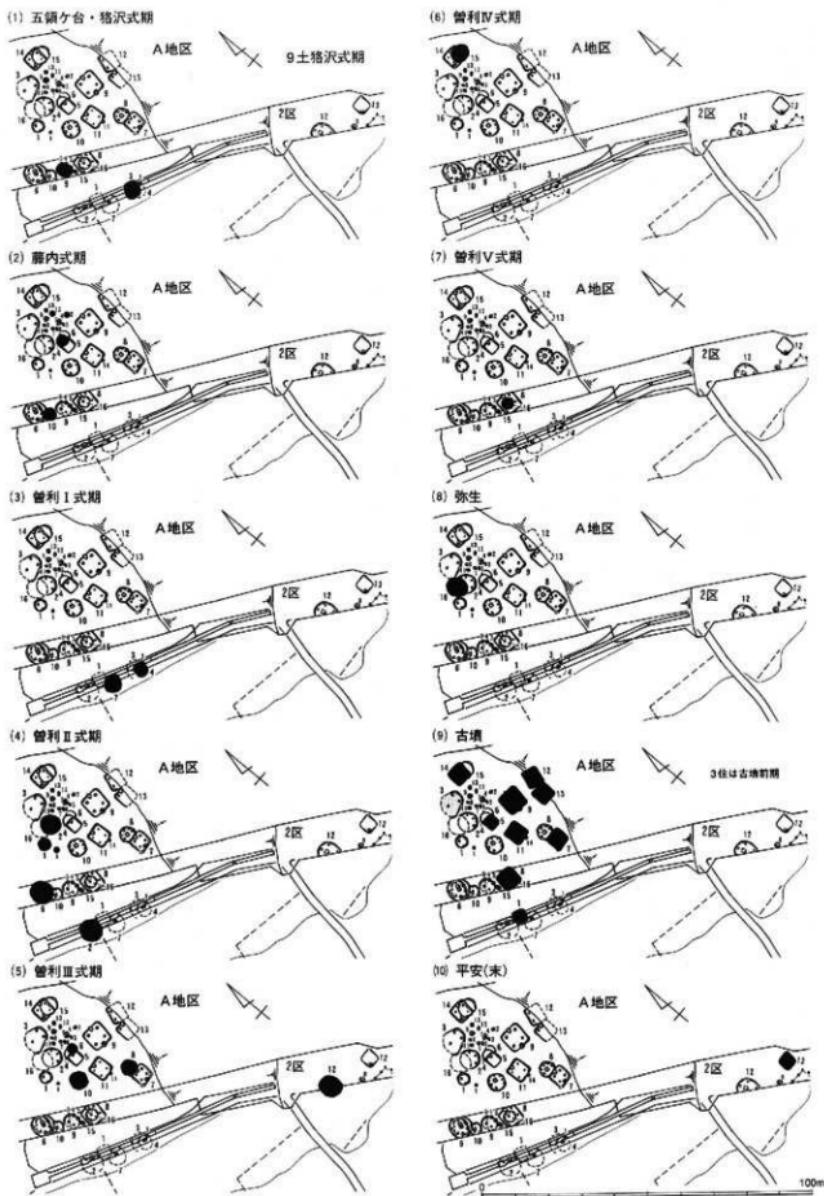


図5 柳坪A・柳坪・柳坪北遺跡 集落変遷図

号竪穴）。その後、後期鬼高式期には柳坪Aから柳坪北遺跡にかけての広範囲が集落域となり、9軒の堅穴が確認されている（柳坪A 5・7・9・11～14号住、柳坪8号住、柳坪北1号竪穴）。それらはほぼ同時期であるが、12号住と13号住が壁を接することから、少なくとも2小時期の時間差を含んでいる。竪穴は北方に主軸を描え、北竈をもつなど、構造的に共通性がうかがえる。集落構成ははっきりしないが、最も規模の大きい柳坪A 9号住、あるいは柳坪16号住を中心に、周囲にやや小型の竪穴が付随するような配置をみせている。いずれにせよ、八ヶ岳南麓でこのような古墳後期の集落が検出された事例は少なく、八ヶ岳南麓の開発史の中では注意すべきである。注目すべき遺構に屋内貯蔵穴があり、柳坪A 7号住では庵反対側の南壁中央と南東柱穴付近に方形ピットが存在し、同9号住には南壁中央に存在する。今回の柳坪北1号竪穴例は南東柱穴付近の貯蔵穴である。

木本健氏によれば、柳坪A遺跡の古墳時代鬼高式期前半の住居の特徴として方形、4本柱、北竈で、規模の大きな住居が張り出しピット（貯蔵穴）をもつ傾向があるという（木本1975）。また県内の屋内貯蔵穴についても宮澤公雄氏がまとめている（宮澤1999）。それによれば県内の古墳時代竪穴式遺構の概要が明らかとなる約600軒中、貯蔵穴をもつものは約100軒で、前期245軒中61軒、中期28軒中7軒、後期332軒中32軒であるという。また貯蔵穴に付随する施設として凸堤をもつ例があるとのことで、柳坪北1号竪穴のピットをつなぐ溝、床面の高まりも貯蔵穴に関連した施設として捉えられる。

平安時代では埋没谷東側の柳坪B遺跡を中心に集落が広がる。時期的には9世紀後半から10世紀後半にかけて、10世紀前半を竪穴数のピークとする（註2）。図の遺構変遷図では柳坪13号住（10世紀後半）が1軒示されているのみで、埋没谷以西の柳坪A遺跡周辺には堅穴は少ないようである。柳坪遺跡のほか、周辺の柳坪南遺跡、境原遺跡の状況から推測すると、南側にかけて広範囲に相当数の竪穴、掘立柱建物が分布している状況がわかる。

註1 牡丹遺跡発掘調査団ほか1997『牡丹遺跡第3次調査報告書』北川摩地域の炉については山本の論文がある。山本茂樹1999『山梨県北巨摩郡地域の縄文時代中期の石臼炉の形態について』『山梨考古学論集IV』山梨県考古学協会

註2 柳坪遺跡の報告書中の遺構変遷図では、10世紀第3四半期をピークとしているが、甲斐型土器編年見直し後の今日の年代観によれば、10世紀第2四半期を中心とした年代に相当する。

## 第2節 2号竪穴出土土器について

### 一 結節縄文をもつ土器を中心について

2号竪穴内からは結節縄文をもつ深鉢が2個体出土した。2号竪穴7・9で、ともに口縁部に2本の隆線で連弧状につなぎ、区画内に縦位に条線、沈線文を施文する。そのほか、6は結節縄文はもたないものの胴上半が縄文、下半が列点文という折衷土器で、胴部に田の字状（交差点状）区画文をもつ。同様のモチーフは10にもあり、区画内は縫杉沈線文としている。ほかに8の斜行線文をもつ縦線文土器、12の肥厚帶口縦土器がある。これらの位置づけを探るために、まず結節縄文をもつ土器について考えてみたい。

結節縄文をもつ土器（ここでは結節縄文土器とよぶ）は、從来いわゆる曾利縄文系土器の中で扱われてきた。1965年の「井戸尻」では、富士見町居平4号住の縄文地文土器4個体に關し、「曾利II式期の次にくるべき時間的位置をもつものであることはほぼ確実だが、住居跡重複の資料をまだつかんでいないので、後述する曾利III式との前後関係はいま早急にはわからない」とし、仮に曾利III式Aとされた。同時に藤内1号住の結節縄文をもつ土器が曾利III式Aの「亜類であろう」として図示されている（藤森1965）。

その後、曾利III式Aの位置付けについては修正案が提示される。長崎元広氏は1973年、曾利III式Aは曾利II式の1類型として捉えるべき、といちはやく異議を唱えた（長崎1973）。

1978年に刊行された『曾利』で、小林公明氏は曾利II式の竹管文系・縫杉文（唐草文）系をA、縄文系をBとした場合、それまでAからBへという時間差で捉えられていたが、地城差であって、「A・Bの区別は廃止した」とする修正案を提示した（小林1978）。

同年、米田明訓氏は「曾利式土器編年」の基礎的把握で、「井戸尻編年」に混在する唐草文土器を除外し、曾利IIIa式を曾利IIに、曾利IIIbを曾利IIIに位置け、土器群を型式・形式・文様帶で整理して系統を把握しようとした（米田1978）。また「縄文原体結節の回転」に注目し、発生原因は不明としながらも縄文地文は加曾利E・大木式の影響かとしている。

翌年、長崎元広氏らの中部高地縄文土器集成グループは縄文地文土器を「曾利縄文系」として曾利II式期に位置付けるとともに、頸部の屈曲が強い深鉢を新しい一群として曾利II式の2細分の可能性を示した（中部高地縄文土器集成グループ1979）。このように曾利式土器の細分化への道筋を立てるとともに、曾利縄文系をはじめとする各土器群の分布の小地域差についても言及している。

1980年のシンポジウム「縄文時代中期後半の諸問題」では、曾利繩文系土器が議題の中心となった（1980・1981）。米田氏は從来の曾利Ⅲaが曾利Ⅱ式に繰り上がる点を主張し、長崎氏もあらためて曾利Ⅱ式期の2細分案を提示したが、加曾利E式側からの視点では十分に理解が得られず、議論は空軋した。

1986年、「柳坪遺跡」で米田氏は結節縄文土器の縄年代的位置付けに関する研究史を概観し、結節縄文と刺突文土器との時間差を弧線文土器（連弧文土器）の地文のあり方を介在させて解釈した（米田1986）。すなわち、弧線文土器には地文地文土器が多いことから、曾利式の縄文地文が「弧線文土器の系統に起因しているのかもしれない」と仮定できるものの、「弧線文土器で結節縄文を伴うものは見つけ出すことはできなかつた」。したがって「弧線文土器は、結節縄文手法の消滅直後、地文に刺突文を主体的に使用する段階と同じに登場してくる」と推測した。また縄文地文土器群をB型式「I縄部文様帶と休部文様帶を有する非加曾利E式的土器群」と規定したうえで、B1型式—粘土紐の貼付による弧線文を施文、B2型式—粘土紐の貼付あるいは隆線による渦巻きつなぎ文を施文、B3型式—沈線文で弧線文を施文（連弧文土器）、等と分類して系譜を追った。結論として曾利Ⅱ式期を2細分する形で、第Ⅲ段階—地文は結節縄文主体、第Ⅳ段階—地文は刺突文を多用し、B3型式登場、と段階設定している。この編年案を1980年シンポへの回答としたのち、米田氏は口を閉ざしてしまった。

1980・81年に調査が行われた駿迎堂遺跡の報告書は、1987年刊行された（小野1987）。その中で小野正文氏は、曾利式の結節縄文はほとんどなく、八ヶ岳南麓の地域的現象だろうと記している。

1995年、黒尾和久氏は駿迎堂遺跡群の報告書を分析する中で、曾利繩文系土器は多摩地域の連弧文土器の出現以前に成立していたことを明らかにし、曾利Ⅱ式2細分に対応する加曾利E式の併行関係を探った（黒尾1995）。

1996年、山形真理子氏は「曾利式土器の研究」の中で、「曾利繩文系」土器群を曾利古式から新式へ移行するうえで影響力の大きな土器群であったと再評価した（山形1996）。山形氏は曾利繩文系土器群を曾利式の「中核的」な土器群ではないが、「加曾利E式との接触の中で曾利式の内部に生成した土器群」と考え、時期的には曾利古3式～曾利新1式期とした。また結節縄文をもつのは八ヶ岳南麓独自の地域性としている。

1999年、今福利恵氏は「山梨県史」の中で、曾利Ⅱ式について「胴部文様の地文や體垂文のありかたなど

から2細分する考えがあるが、その型式差は八ヶ岳方面と甲府盆地方面の地域差である可能性が高い」と捉え、細分していない（今福1999b）。また同年の『縄文時代』の中で今福氏は山形論文に対し、山形氏が再評価した「曾利繩文系土器」は、研究史をふまえれば適切な用語ではなく、刺突文や条線文などと同様に「縄文地文を特徴としている時期的な様相をとらえたものにすぎない」と批判した（今福1999c）。

同年、櫛原は縄文（結節縄文）地文土器群を「つなぎ文（く画文）類型」としてまとめ、枠状区画をもつ土器群（区画文土器）の祖形として、曾利Ⅱa～Ⅱb式期に位置付けた（櫛原1999）。結節縄文土器については縄文地文土器群の中でも古相とみなし、主に曾利Ⅱa式期に位置付けている。

以上のように、これまでの曾利式土器編年では結節縄文土器を曾利Ⅱ式期に置く点では大方の一致をみていている。しかし米田氏のように曾利Ⅱ式期内の時間差として、Ⅱ式前半と捉えようとする意見と、今福氏らの主張のように、地文の違いはあくまでも地域差にすぎず、細分は難しい、とする意見が対立し、混迷している。

今回の2号竪穴資料は、口縁部文様帶中の区画文が確立した様相を示し、同じ結節縄文土器群の中でも新しい一群と予想される。そこで、結節縄文土器を集成し、分布と型式的な変遷を想定することで曾利Ⅱ式土器の実態を見直してみたい。曾利Ⅱ式の細分問題については本稿でただちに決着できる課題ではないが、結節縄文土器に伴出する土器群のあり方にも注意を払ってみたい。

結節縄文土器（註1）は、管見では山梨県、長野県、静岡県、東京都、神奈川県の36遺跡から82点が出土している（図6～8）。そのうち山梨県大泉村、長坂町、高根町、長野県富士見町域に集中し、1遺跡、あるいは1軒の竪穴中から複数個体が出土する状況を示し、從来指摘されてきたように八ヶ岳南麓（註2）の特徴的な土器群といえる。同じ曾利式土器分布圏内でも駿迎堂遺跡では相当数の曾利繩文系土器が固化されているにもかかわらず、結節縄文土器は2例のみ存在するほか、中道町上野原遺跡に1例ある程度で、甲府盆地側にはほとんどない状況といえる。

南麓の集中地域以外では1遺跡1～2点程度の出土量である中で、やや特異事例として静岡県では三島市押出寺遺跡に4個体の出土事例がある。富士川流域から静岡方面の様相については十分に明らかではなく、とくに岐西地方から南巨摩郡、岐南地方については、調査例が少なく、ほとんど中期後半の様相は見えてい

ない。したがって現状では八ヶ岳南麓全体とみてよいが、釜無川・富士川を通じて静岡東部方面と密接に結びついた様相をもつと考えられる（註3）。

東側に目を転じると、横浜市大熊仲町遺跡で2例があり、八王子市小田野遺跡に1例がある。前者は八ヶ岳南麓と同様の深鉢であるが、後者は竹管文による連弧文をもった深鉢である。基本的には加曾利E式土器分布圏にはないとされるなかで、それらは曾利繩文系の東端の状況を示すものとも考えられるが、むしろ結節繩文土器が周辺土器型に影響を与えた結果とも考えられる。つまり大熊仲町例は加曾利E式土器に結節繩文が移入された土器、小田野例は連弧文土器に結節繩文が移入された例とみることもできよう。

八ヶ岳南麓の西側では、辰野町を西限として結節繩文土器が分布する。ほかに唐草文土器に結節繩文が移入されている事例を源訪市本城遺跡と富士見町唐渡宮遺跡で1点ずつ確認できた。こうした結節繩文をもつ土器は、唐草文土器の中心とされる松本盆地から上伊那地方では曾利II式併行期にはほとんど目にしない。したがって唐草文土器分布圏でも曾利式土器分布圏と重複する地域、あるいは接触する地域で結節繩文土器からの影響を受けて出現したと考えることができるだろう。

さて、結節繩文土器の器形には平縁深鉢を主とするほか、X把手深鉢、両耳鉢、壺がある。個体数では平縁深鉢63個、X把手深鉢7個、鉢4個、把手付鉢2個、壺1個と、深鉢が圧倒的である。静岡県本立野遺跡出土とされるX把手付深鉢を除けば、八ヶ岳南麓以外で深鉢以外の器形が出土する遺跡はまれといえる。逆に南麓集中域では深鉢以外の器種を伴っている。

南麓集中域では、結節繩文土器がいくつかの器種のセット構成をなすのだろうか。1軒の竪穴内廃棄状況で異なる器種どうしのセット関係を示唆する出土事例には富士見町向原9号住で深鉢1と鉢1、唐渡宮21号住でX把手付深鉢1と鉢1、坂上遺跡1号住に深鉢1と両耳鉢1、高根町社口遺跡7号住に深鉢1と鉢1があるものの、そもそも深鉢以外は少ないとから可能性は弱いといえる。

平縁深鉢は口縁部文様帯の有無、口縁部文様帯の文様構成によって以下のように分類ができる。

A類一口縁部文様帯をもつもの。

A 1類一口縁部に口縁に平行した隆線1・2本を貼付して区画帯とし、中に渦巻文などを配置する。

A 2類一隆線の渦巻文を1・2本の隆線で連弧状につなぐ「渦巻つなぎ弧文」。

A 3類-2本隆線で連弧状につなぐ「つなぎ弧文」沈線文（連弧文）も仮に含める。

A 4類一沈線文で渦巻文、梢円形の区画文をえがく。

B類一口縁部文様帯のないもの。

さらに各A類は区画内を胴部と同様に縄文地文とするもの（a類）、区画内に縦位に沈線あるいは条線を施文するもの（b類）がある（ただしA 4類はb類のみ）。以上の土器胴部には単節斜行縄文を施文したのち、渦巻文やつなぎ文の連結部を起点として垂直に結節繩文を継位施文する。中期末にみられる結節繩文とは施文手法上区別されるものである（註4）。

A類はどのように変遷するだろうか。曾利III式への系譜を考えると、区画文の末段階から出現、発達へ、単純から複雑へという過程が想定できる。つまり区画内はa類からb類への変遷が予想される。A類とB類の関係、A 1～4類どうしの関連については定かではないが、例えばB類からA類へ、あるいはA 3類からA 2類へ（連弧文から渦巻つなぎ弧文へ）の発展過程を単純に考えることはできないし、その材料も持ち合わせていない。ここではA 4類を除く各類型内にa類、b類があることから現段階ではa類（結節繩文・古段階）→b類（結節繩文新段階）という想定にとどめておく。

以上のような視点で柳坪北2号竪穴資料を再確認すると、7はA 2 b類、9はA 3 b類で、ともに結節繩文土器新段階である。とくに7は口縁部モチーフからすると曾利III式期としたくなるが、曾利III a式段階では沈線化した渦巻つなぎ弧文であるのに対し、7では隆帶が低平化しているものの、2本降線により渦巻隆線文をつなぐという原則が守られているため、III式直前のII式期に入る事例としたい。したがってII式を2細分する案（柳原1999）に沿って、a類を結節繩文古（II a式）段階、b類を新（II b式）段階としたい。これは從来結節繩文=曾利II式古段階とした1999年段階での編年私案（柳原1999）觀を見直すものである。結節繩文はII a段階に多く、II b期に減少するもののII期を通して存在すると訂正する。6については区画内に沈線文がないが、2本のつなぎ隆線間に縦位沈線を施文し、区画内に対する施文手法と同様といえる。したがってII b式段階とみなされる。このように、口縁部区画内の沈線文の有無は時期区分のひとつ基準として有効と考えられ、結節繩文以外のいわゆる曾利繩文系土器全般に普遍化できるのではないかと考えられる。

結節繩文古（曾利II a）段階の竪穴例には単独の好例はないが、頃無12号住、曾利50号住がある。本段階

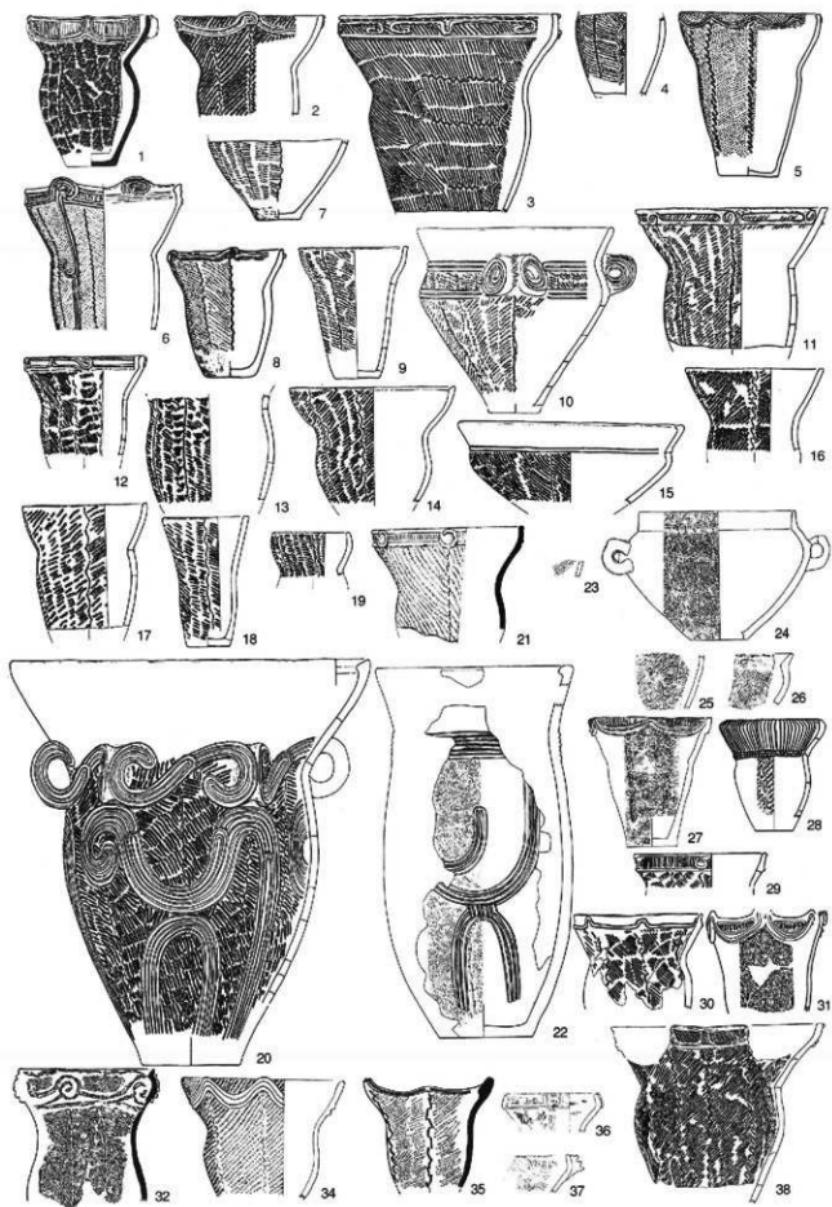


圖 6 結節繩文土器(1)

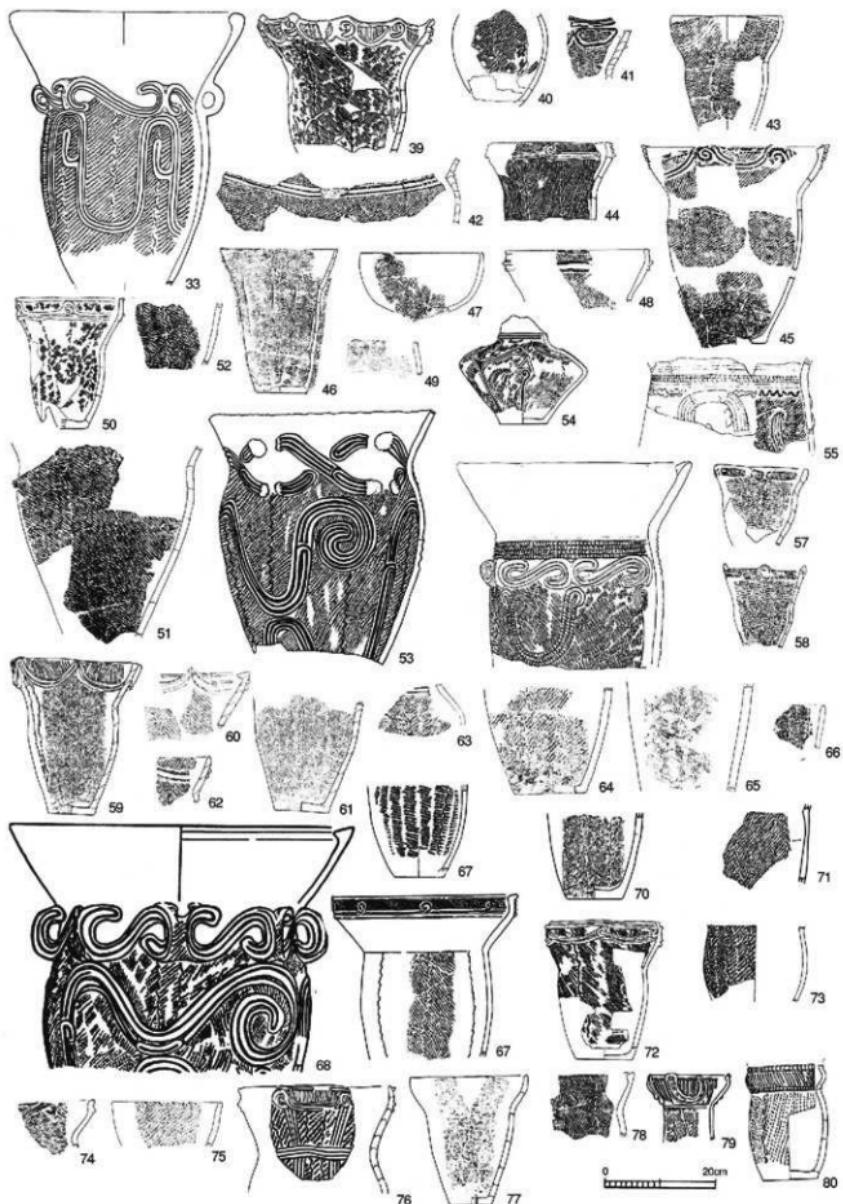


図7 結節縄文土器(2)

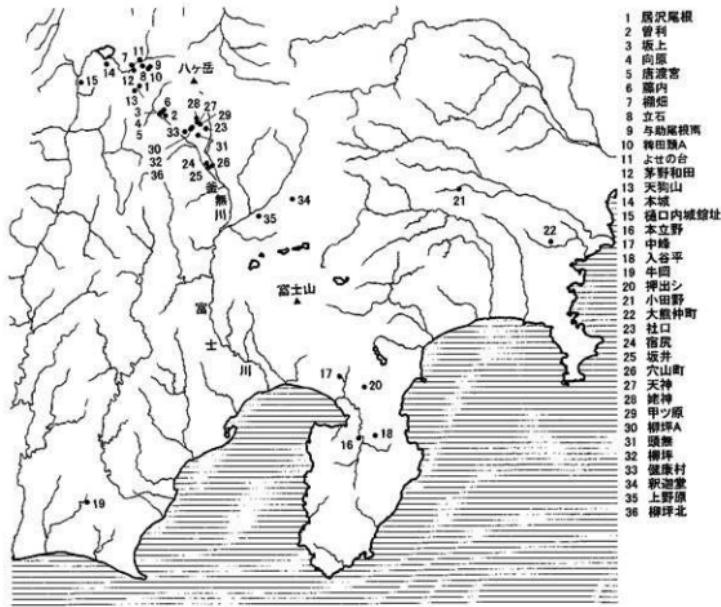


図8 結節縄文土器出土遺跡分布図

表1 結節繩文土器出土遺跡

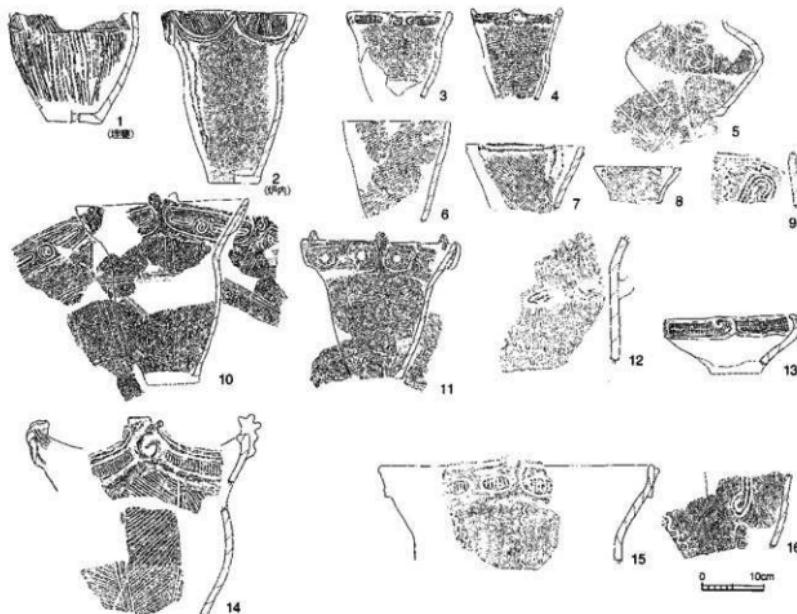


図9 大泉村姥神遺跡21号住の土器

あるいはそれ以前の資料として大泉村天神遺跡7号住に頸部文様帯を残すX把手深鉢があり（米田1986）、茅野市棚畠遺跡297号土坑例も同様のX把手深鉢と考えられる事例である。しかし八ヶ岳南西麓のX把手深鉢は南麓のそれとは文様構成が異なり、頸部に横帯文を残し、井戸尻式以来の人体文系譜のモチーフのため、古柏にみえるのかもしれない（伊藤1998）。

結節縄文新（曾利I b）段階の竪穴例として本遺跡2号竪穴のほか、好例として大泉村姥神遺跡21号住がある（図9）。結節縄文土器3個体（2～4、A 3 b類1点、A 4 b類2点）のほか、山線部区画文間に列点文、刺突文をもつ上器が3個体ある（10～12）。A 4 b類とした土器（3・4）の区画内文様も見方によつては刺突文であり、刺突文卓越の時期といえる。確實な肥厚帯U縁は伴わないが、萌芽的な様相をもつ土器がある。また浅鉢（13）にも口縁部文様帶には刺突文が伴う。

柳坪A 1号住には結節縄文土器はないが、口縁部区画内に縦線沈線が施された曾利縄文系土器などがある。柳坪A 2号住には、曾利縄文系に口縁部区画内沈

線を持つ例が見られないものの、II b段階に多い刺突文土器があるほか、連弧文と刺突文の折衷土器が存在し、柳坪北2号竪穴に似た様相といえる。

結節縄文の出現に関しては、1980年段階に米田氏が系譜はわからないと述べて以来（米田1981）、現在まで出典に関して言及した論考はない。結節縄文は加曾利E式にはほとんどなく、曾利分布圏内でも加曾利E式土器分布圏寄りの地域にはほとんどないことから、関東方面からは生じ得ない手法といえる。また曾利I式からの系譜をたどると、曾利縄文系自体が加曾利E式上器の影響とされていることから、伝統的な曾利式の技法ではない。しかし八ヶ岳南麓に集中的に存在する点から、現時点では曾利縄文系上器の中で出現した技法とみなしておるのが最も妥当であろう。この結節縄文技法は、曾利III式以降定着する蛇行沈線文の祖型とみなすこともでき、曾利式後半（山形氏のいう曾利新式）では基調をなす文様といえる。したがって曾利式上器全体のなかでは變になる重要な文様であり、その出典に関しては、曾利式土器の形成そのものを考えるヒントが潜んでいる。

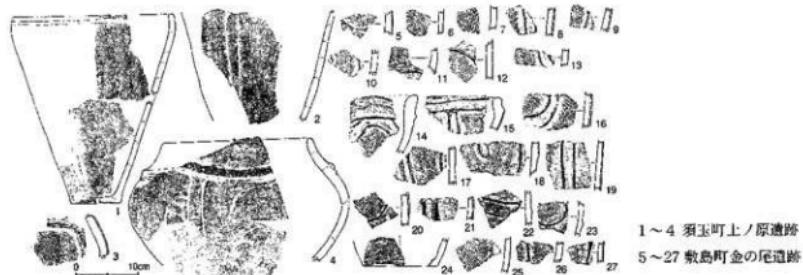


図10 山梨県内出土の中期末結節縄文土器

今後、結節縄文と時期的に関連する刺突文土器のあたり方を同様に探る必要があるとともに、曾利II式以降大きく変化する竪穴構造、炉形態などの造構論とどのようにリンクするのか検討し、縄文時代の集団の実態に迫ることができればと考えている。

註1 中期末、長野県伊那谷から静岡方面にかけて加曾利E3式土器に結節縄文を施す土器があるが、ここでは曾利II式のものとは系統が異なるものとして除外する。曾利II式では単節縄文施した後に單位文から垂下するように結節部のみを施文するに対し、中期末のそれは結節部と縄文部が一続きの原体である。

註2 ハゲ岳南麓の定義はあいまいだが、長野県富士見町から山梨県高根町付近へ埼玉市にかけての、ハゲ岳の山体崩壊で形成されたいわゆる台上地城をさす。したがって茅野市方面の西南麓とは区別する。

註3 静岡県東部愛鷹山麓では鉢土分析の結果、土器が甲府盆地から搬入されたか、粘土が移動した可能性があると推測されている。結節縄文土器の分布は東西地域間の交流の深さを暗示している。そうした予測に有利な結果を示している。

註4 中期末の結節縄文土器については当初、神村透氏によって指摘された（神村1978）。中期末の加曾利E式的な上唇部を集成し、段階設定しているが、注目すべきは「0段階」以前として、竪口内面趙跡、本城遺跡何をあげて中期末の結節縄文の祖型を曾利II式期に求めることである。なお中期末の結節縄文土器については近年、静岡県の松本一男氏によって集成作業が行われ、長野県伊那谷方面から静岡県側の天竜川流域に広く分布していることが明らかにされ、「広野C式土器」として再評価されている（松本1999）。

中期末の結節縄文は、結節をもつ縄文原体で同時施文される文様であり、時期的には中期末に限られる。甲府盆地でも数島町金の尾遺跡（木本ほか1987）、須玉町上ノ原遺跡（柳原ほか1999）などで出土している（図10）。

#### （参考文献）

- 藤森栄・武藤雄六 1964 「信濃境曾利遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』1  
藤森栄 1965 「井戸尻」  
長崎元広 1973 「ハゲ岳西南麓の縄文中期聚落における共同祭式

のありかたとその意義」『信濃』25-4・5

木本 健 1975 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書  
—北巨摩郡長坂・明野、並崎地内—」

米田明訓 1978 「曾利式土器編年の基礎的把握」『長野県考古学  
会誌』30

神村 透 1978 「結節縄文をつけた一群の土器—飯山地方縄文中期  
終末—」『中部高地の考古学』長野県考古学会

武藤雄六・小林公明 1978 「曾利」

中部高地縄文土器集成グループ 1979 「中部高地縄文土器集成」

神奈川考古同人会 1980 「神奈川考古10 別冊 シンポジウム縄文  
時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器との  
関係について—」問題提起・地域別報告 発表要旨

神奈川考古同人会 1981 「神奈川考古11 シンポジウム縄文時代  
中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器との関係に  
ついて—記録集」

米田明訓 1986 「柳坪遺跡、山梨県教委ほか

木本健ほか 1987 「金の尾遺跡 無名塚（きづね塚）」山梨県教委  
金子裕之 1994 「豆豆を中心とした縄文中期後半の様相」『地域  
考古学』向坂嗣・先生還暦記念論集刊行会

黒尾和久 1995 「櫛坪北端蒸籠跡の基礎的検討（1）」『論集  
宇津木台1』 宇津木地区考古学研究会

山形真理子 1996・1997 「曾利式土器の研究」『東京大学文学部  
考古学研究室研究紀要』14・15

小宮山隆 1997 「柳坪南遺跡 墓原遺跡」長坂町教委ほか

伊藤公明 1998 「X字状把手付大型深鉢形土器の展開—八ヶ岳南  
麓を中心として—」『八ヶ岳考古 平成9年度年報』 北巨摩市  
町村文化財担当者会

小宮山隆 1999 「右原田北遺跡」長坂町教委ほか

今福利恵 1999 a 「中野初頭（五輪ヶ台式土器）」『山梨県史』資  
料編2

今福利恵 1999 b 「中部地方 中期（曾利式）」1999 「縄文時  
代」10 縄文時代文化研究会

今福利恵 1999 c 「中期後半（曾利式土器）」1999 「山梨県史」  
資料編2

柳原功一 1999 「曾利式土器の編年私案」『山梨考古学論集IV』

柳原功一ほか 1999 「上ノ原遺跡」上ノ原遺跡発掘調査報告

宮澤公雄 1999 「駒ヶ岳居宅土坑について—いわゆる竪穴内貯藏  
穴について 山梨県内の事例から—」『山梨文化財研究所報』37

松木一男 1999 「結節縄文土器の伝播とそれを可能にしたもの  
『静岡県考古学研究』31

- 黒尾和久・織田茂 2001 「昨今の曾利式土器研究をめぐって—東京都西多摩地域からのなまざし—」『山梨県考古学協会誌』12
- 池谷信之 2001 「静岡からの視点—私的な研究史からみる山梨の縄文中期—」『山梨県考古学協会誌』12
- 平野修はか 2001 「石原田北遺跡」マート地点』石原田北遺跡発掘調査団ほか

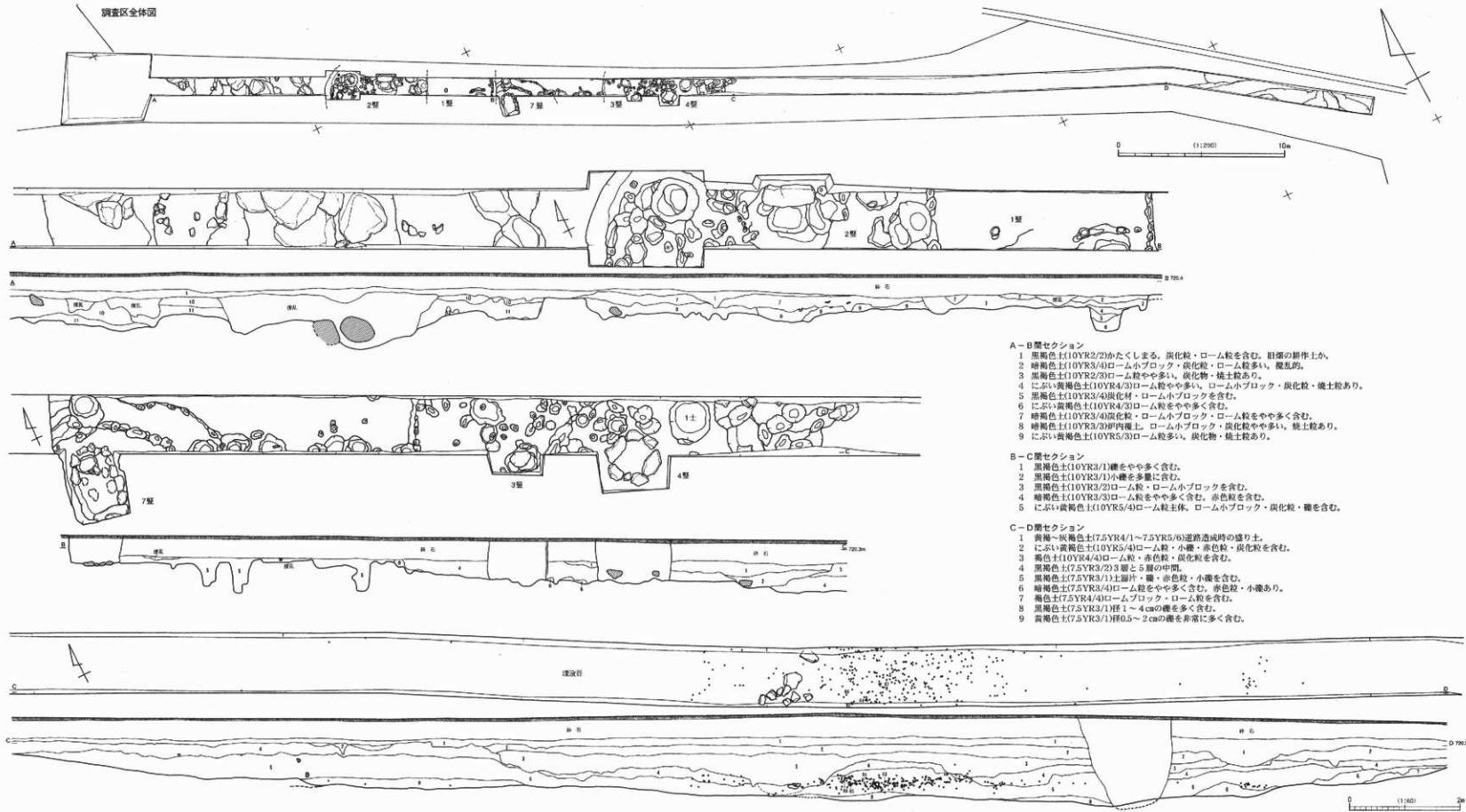
(図6・7の出典一覧)

- 居沢尾根遺跡 青沼博之ほか 1981『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その4—』長野県教委ほか
- 曾利遺跡 小林公明ほか 1978『曾利』當上見町教委
- 坂上遺跡 4 向原遺跡 5 唐波宮遺跡 小林公明ほか 1988『唐波宮』當上見町教委
- 藤内遺跡 藤森栄 1965『井戸尻』中央公論美術出版
- 櫛畠遺跡 守矢昌文ほか 1990『櫛畠』茅野市教委
- 茅野和田遺跡 宮坂光昭ほか 1970『茅野和田遺跡』茅野市教委
- 天狗山遺跡 百瀬・郎 1993『天狗山遺跡』茅野市教委
- 本城遺跡 岡田正彦ほか 1975『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—源訪市その3—』
- 穂口内城館址遺跡 山田瑞穂ほか 1984『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野町その2—』
- 本立野遺跡 13 中峰遺跡 小野真一ほか 1983『駿豆地方の縄文土器集成』加藤学園考古学研究所
- 入谷半遺跡 小野真一ほか 1969『田力都移善寺町入谷半遺跡緊急調査概報』静岡県教委
- 牛岡遺跡 松本・男 2000『溝ノ口遺跡』掛川市教委
- 押出シ遺跡 岩名健太郎ほか 2000『押出シ遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小田野遺跡 井出哲也ほか 1996『小田野遺跡発掘調査報告書』小田野遺跡発掘調査団
- 大熊仲町遺跡 坂上克弘ほか 2000『大熊仲町遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財团
- 社口遺跡 畠原功・ほか 1997『社口遺跡第3次調査報告書』社口遺跡発掘調査団ほか
- 宿尻遺跡 中山誠二ほか 1993『宿尻遺跡』山梨県教委ほか
- 坂井遺跡 22 氷山町遺跡 森和敏 1978『氷崎町誌』
- 天神遺跡 新津 健 1994『天神遺跡』山梨県教委
- 姥神遺跡 畠原功・ 1987『姥神遺跡』人来村教委ほか
- 甲ツ原遺跡 山本茂樹ほか 1998『甲ツ原遺跡IV』山梨県教委ほか
- 柳坪A遺跡 27 収無遺跡 木本健 1975『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野・高幡地内—』山梨考古学研究会
- 柳坪遺跡 米田明順 1986『柳坪遺跡』山梨県教委ほか
- 健康村遺跡 板倉欽之 1994『健康村遺跡』新宿区区民健康村遺跡調査団
- 积加堂遺跡群 小野正文 1987『积加堂II』山梨県教委ほか

表2 土器觀察表

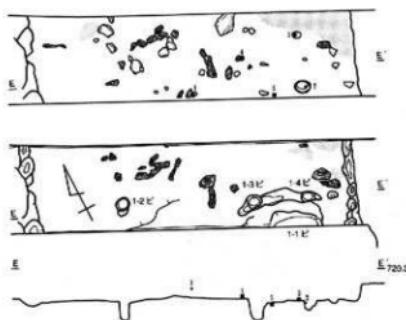
表3 石器観察表

図版	地点	番号	分類	長・幅・厚	重さg	石材	注記内容	備考
5.1壁		3	磨石	10.2/9.7/7.7	1030	安山岩	No.400	全体に赤茶(被熱)、周縁には敲打痕
5.1壁		4	門石	8.2/7.3/4.7	240	安山岩	No.434	凹みは2面
5.1壁		5	石鎌	1.5/1.8/0.3	0.46	黒曜石	No.643	
7.2壁		27	打斧	9.8/5.1/2.3	170	砂岩	No.709	
7.2壁		28	打斧	7.5/4.4/1.2	40	新板岩類	No.710	
7.2壁		29	凹石	14.5/8.7/3.8	510	安山岩	No.563	2面
7.2壁		30	凹石	16.2/7.6/3.0	330	安山岩	No.760	2面
7.2壁	石裏	31	凹石	11.7/7.0/5.5	780	安山岩	No.850	2面
8.2壁		32	凹石	12.3/9.4/8.0	990	安山岩	No.562	
8.2壁		33	凹石	11.0/6.6/3.7	420	安山岩	No.764	2面
8.2壁		34	石鎌	2.0/1.4/0.3	0.56	黒曜石	No.743	
8.2壁		35	削片	4.5/3.5/1.2	142	黒曜石	No.665	
8.3壁		40	打斧	13.4/5.0/1.9	170	緑色片岩	No.599	側面～刃部磨耗
8.3壁		41	石鎌	2.4/1.5/0.3	0.77	黒曜石	No.591	
8.3壁		42	石鎌	1.3/1.1/0.3	0.30	黒曜石	No.587	
9.4壁		49	磨石	17.3/7.7/5.8	1060	安山岩	No.659	磨り面は顯著ではない
10.1土		57	打斧	12.5/4.9/2.1	140	ホルンフェルス	No.824	
10.1土		58	台石?	19.0/15.1/9.2	3710	花崗岩	No.841	
11.5壁		61	打斧	6.8/5.0/1.0	50	ホルンフェルス	埋棲内石器No.2	
11.6壁		62	丸石	26.0/19.0/19.2	11800	花崗岩類	5壁丸石No.1	もろい
12.造構外		71	打斧	10.9/5.3/2.1	150	黒曜石	No.838	
12.造構外		72	凹石	12.9/9.0/6.2	760	安山岩	No.651	
12.造構外		73	凹石	12.9/8.3/3.7	490	安山岩	No.603	
12.造構外		74	石鎌	1.9/1.2/0.3	0.53	黒曜石	...	剥片類

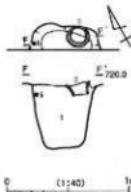


第1図 調査区全体図および断面図

1号竪穴



1号竪穴 1-1号ビット

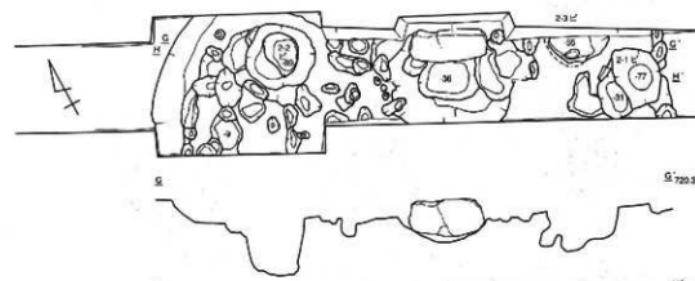


1 黒褐色土  
(10YR2/2)  
ローム粒・赤色粒  
少量含む

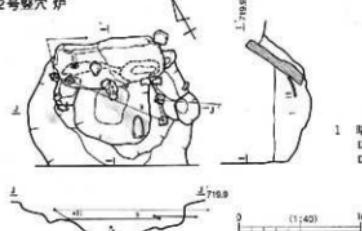
2号竪穴



3室と複合

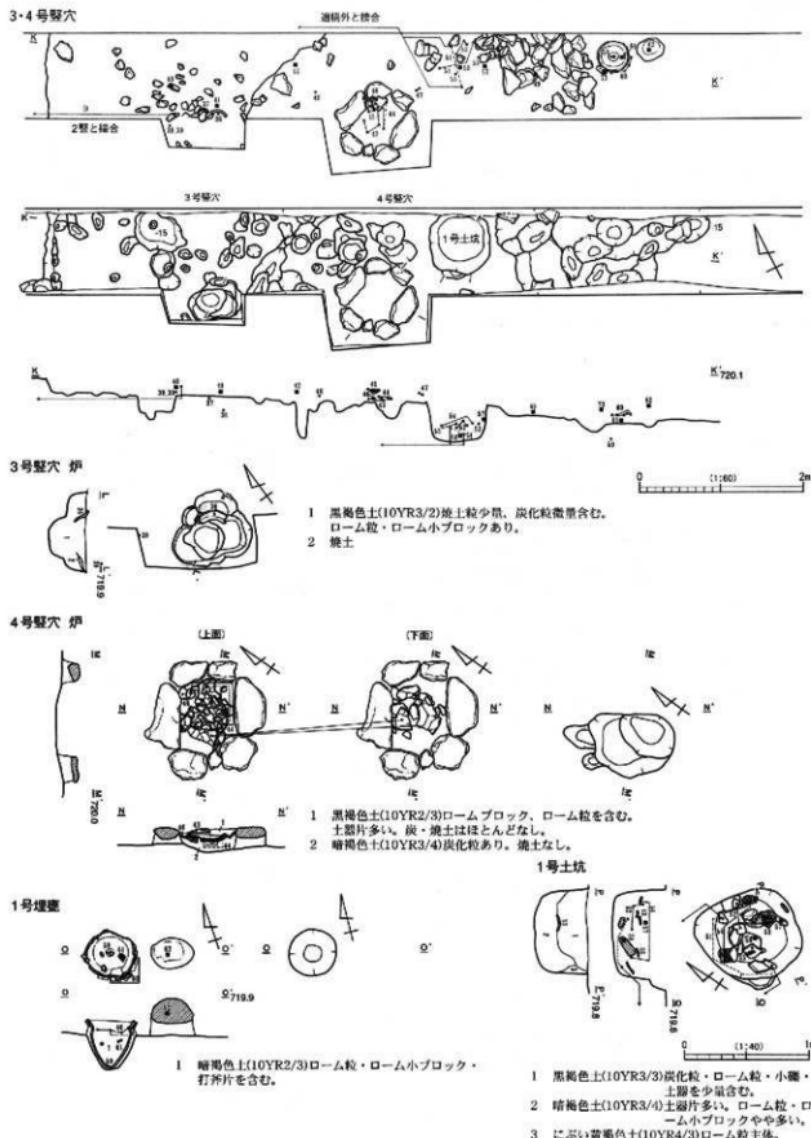


2号竪穴 炉

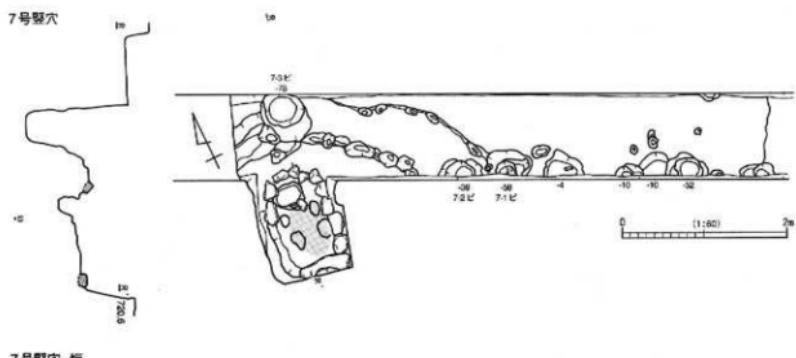


1 暗褐色土(7.5YR3/3)  
ローム粒・粘土粒・炭化粒や多い。  
ローム小プロックあり。

第2図 1・2号竪穴 遺構



第3図 3・4号竪穴、1号埋甕、1号土坑 遺構

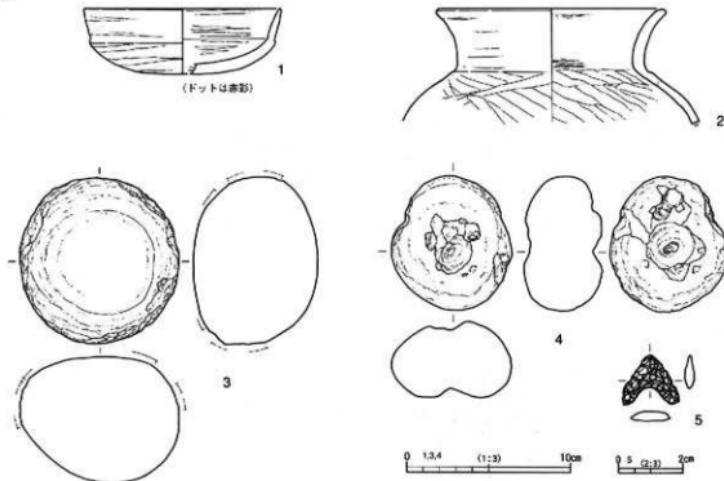


7号竪穴 炉

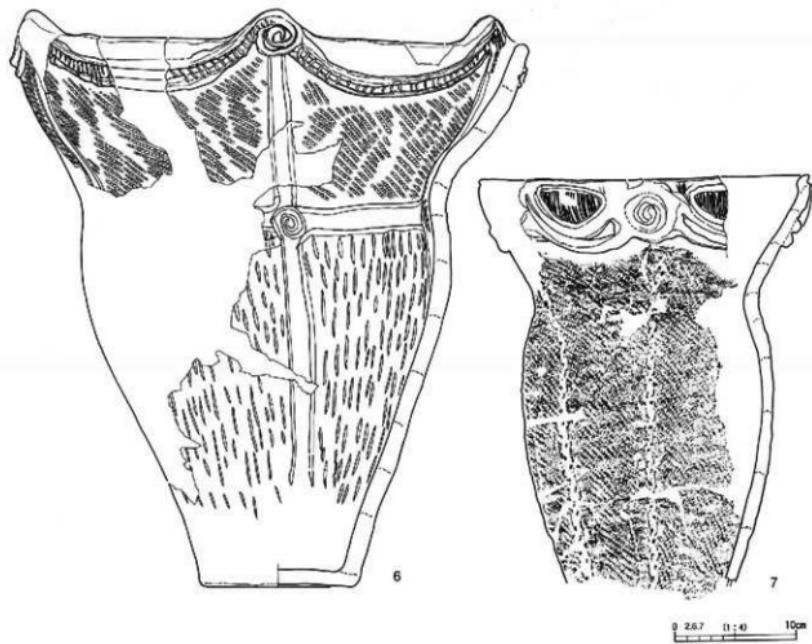


第4図 7号竪穴 遺構

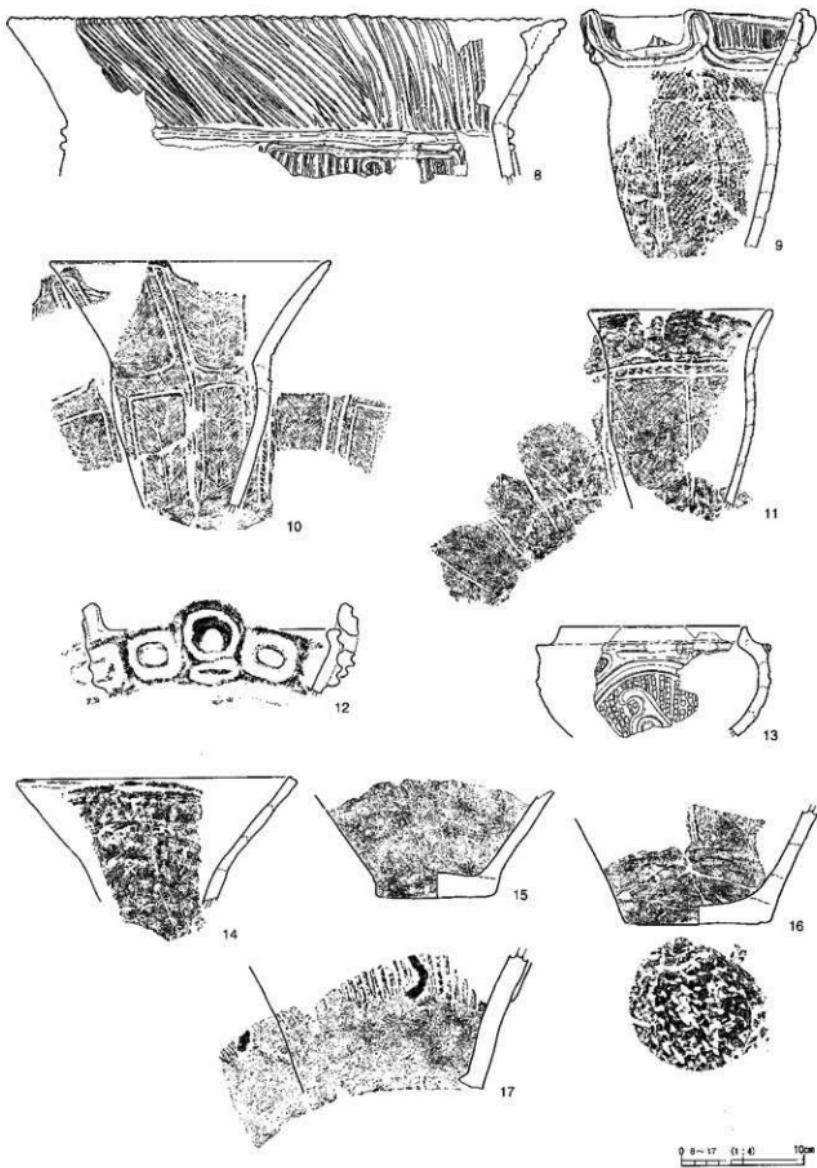
1号堅穴



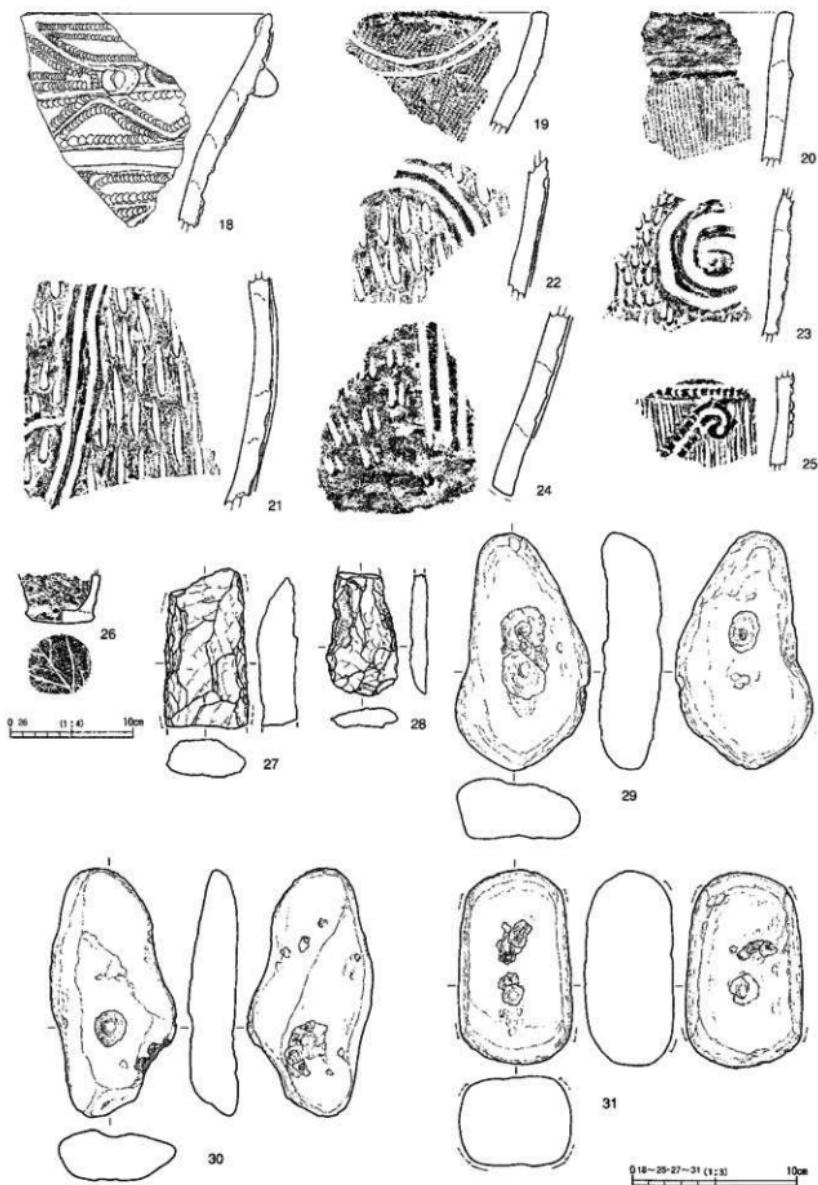
2号堅穴



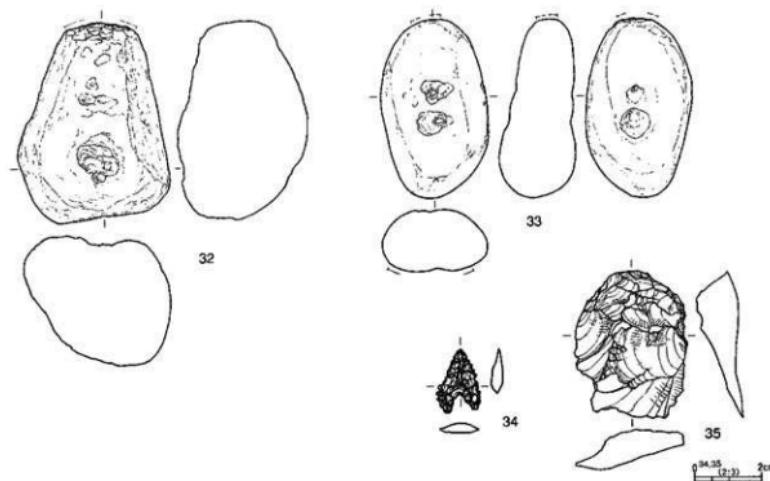
第5図 1・2号堅穴 遺物



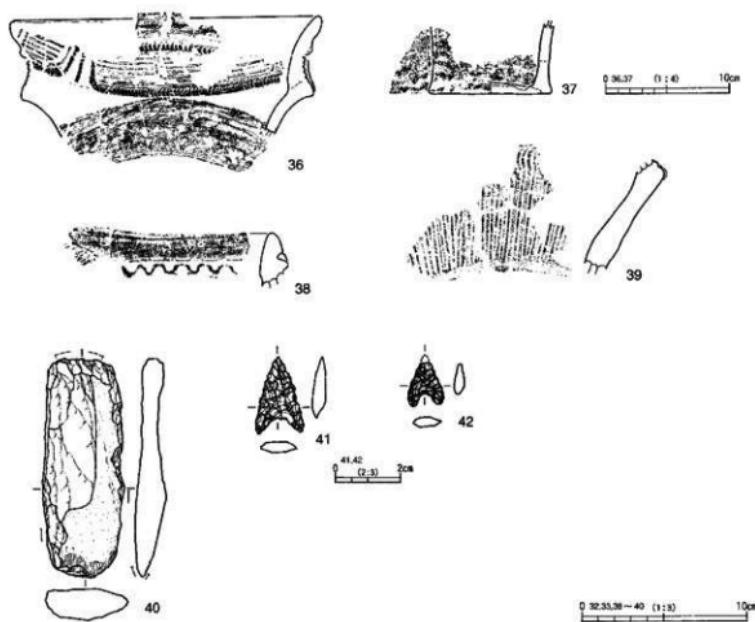
第6図 2号竪穴 遺物



第7図 2号竪穴 遺物

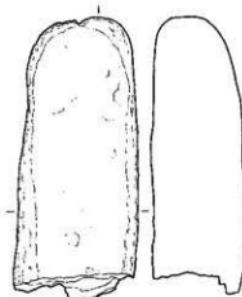
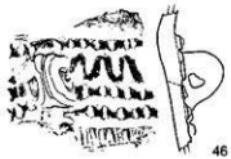
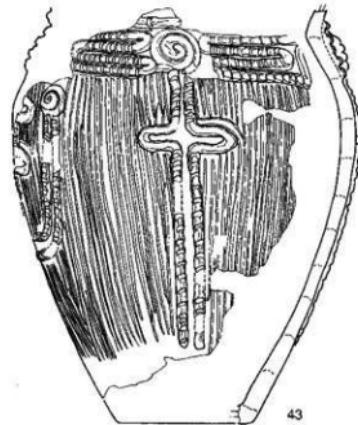


3号墳穴



第8図 2・3号墳穴 遺物

4号竪穴



7号竪穴

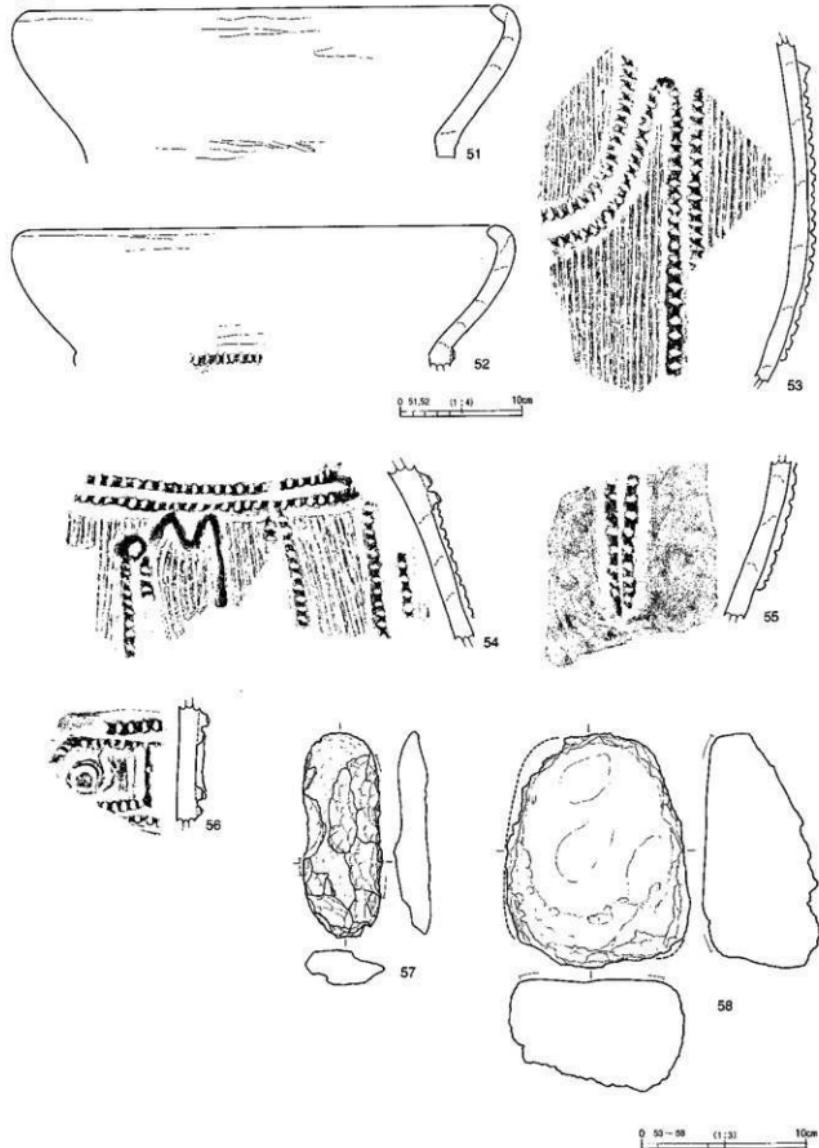


0 43~45.50 (1:4) 10cm

0 46~49 (1:3) 10cm

第9図 4・7号竪穴 遺物

1号土坑



第10図 1号土坑 遺物

1号埋甕



59

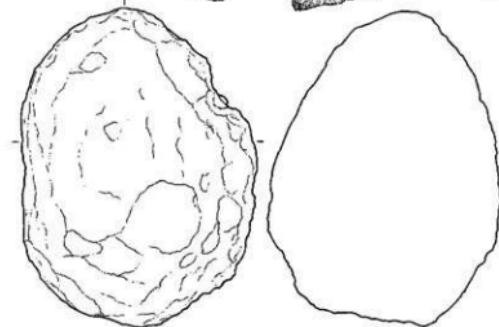


61

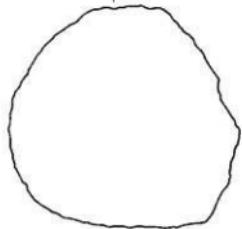
0.61 11.30 10cm



60



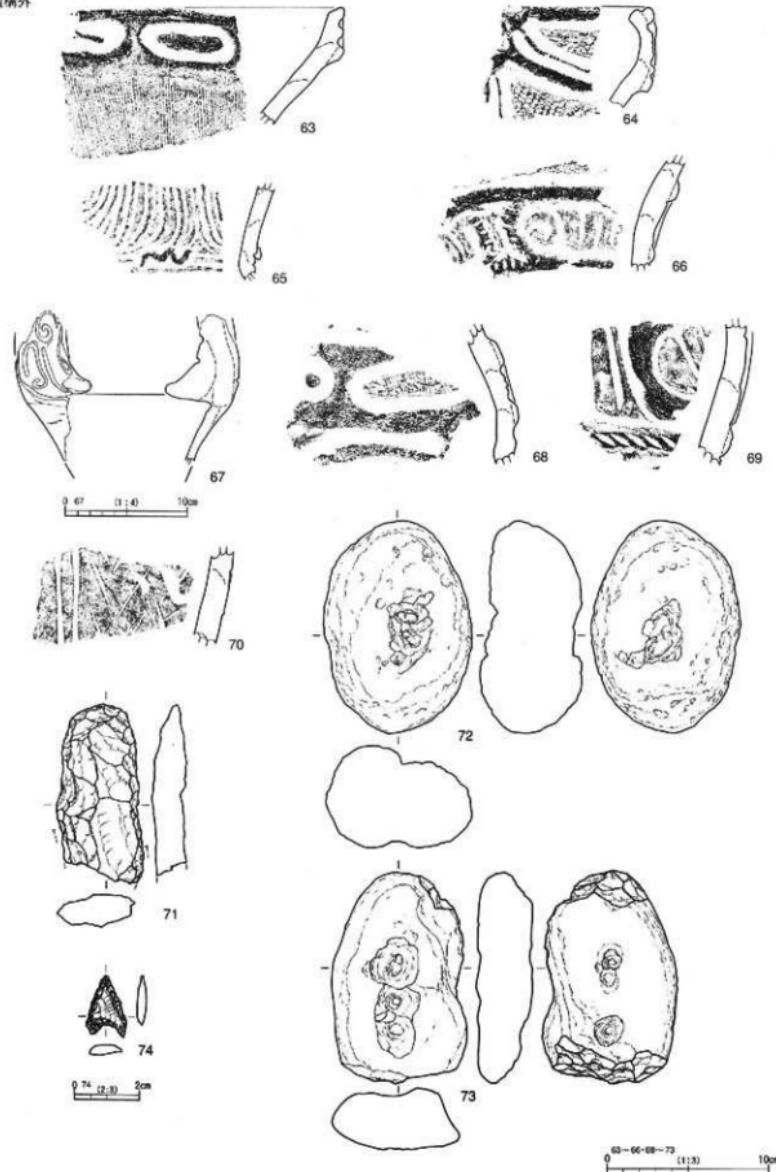
62



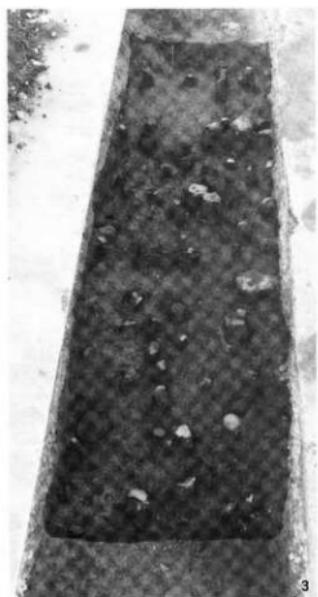
0.59~0.62 (1:4) 10cm

第11図 1号埋甕 遺物

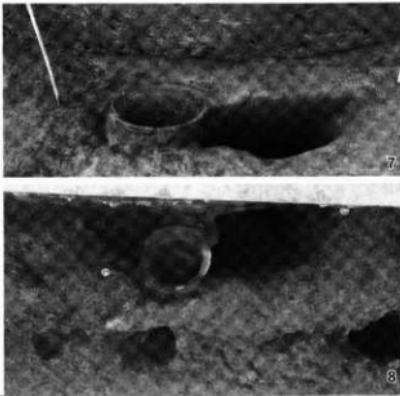
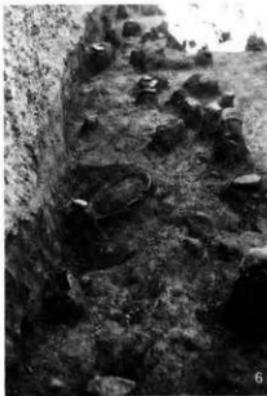
遺構外



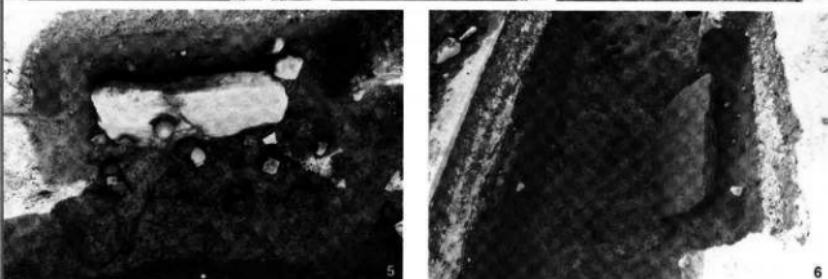
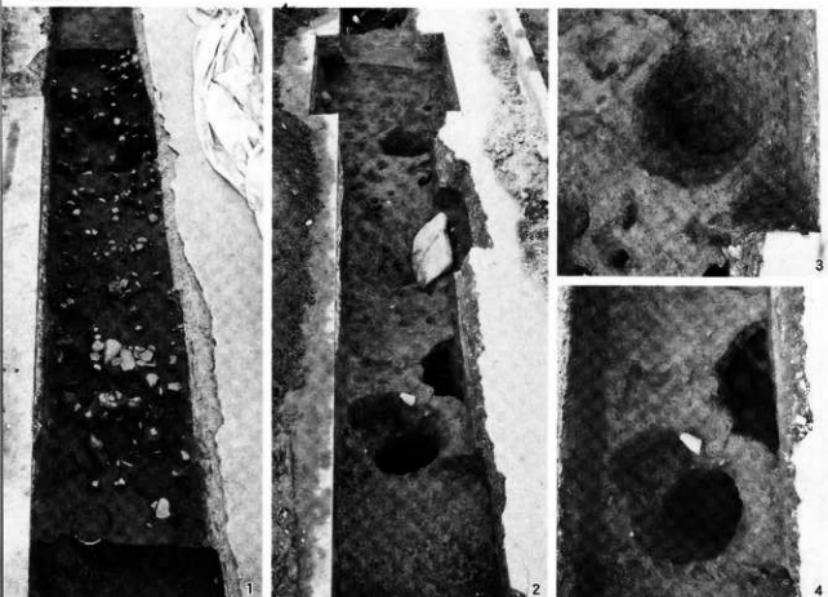
第12図 遺構外 遺物



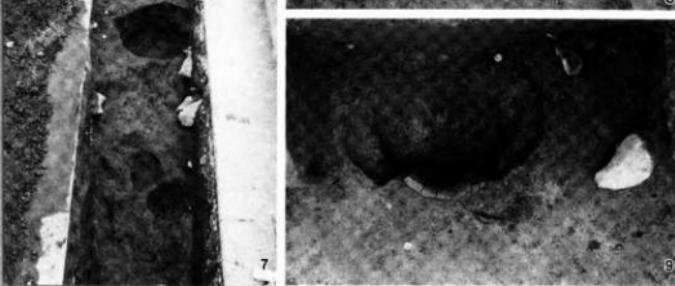
- 1 調査区近景(西側)  
 2 調査区近景(東側)  
 3 1号整穴 遺物出土状況  
 4 1号整穴 炭化材出土状況  
 5 1号整穴 完掘状況  
 6~8 1号整穴内 食出土状況



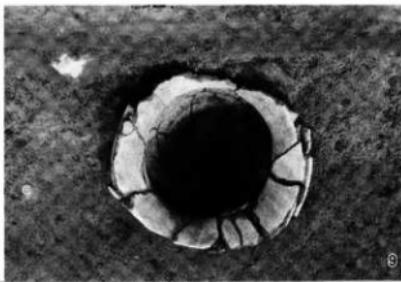
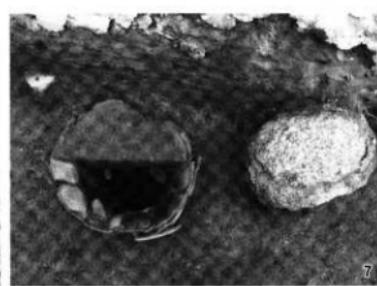
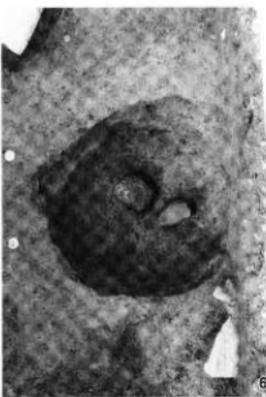
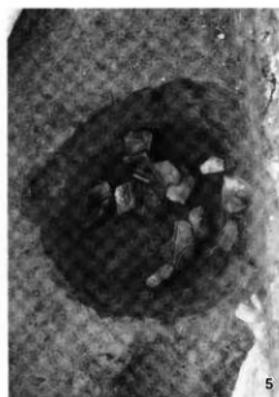
8



- |          |                                                                                                                                                             |
|----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>7</p> | 1 2号竪穴 遺物出土状況<br>2 2号竪穴 完掘状況<br>3 2号竪穴 2号ピット<br>4 2号竪穴 1・3号ピット<br>5 2号竪穴 炉内遺物<br>出土状況<br>6 2号竪穴 炉完掘状況<br>7 3・4号竪穴 炉完掘<br>状況<br>8 3号竪穴 炉確認状況<br>9 3号竪穴 炉完掘状況 |
| <p>8</p> |                                                                                                                                                             |
| <p>9</p> |                                                                                                                                                             |

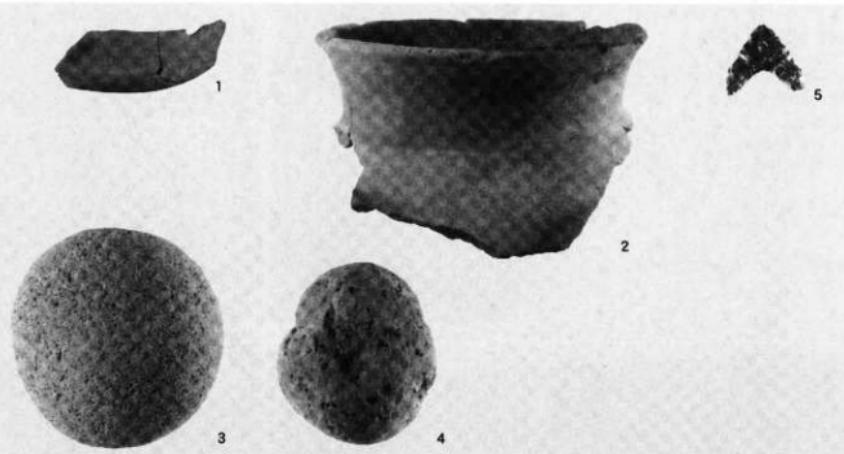


- 1 4号窯穴 炉内遺物出土状況
- 2 4号窯穴 炉完掘状況
- 3 7号窯穴 完掘状況
- 4 7号窯穴 炉完掘状況
- 5 1号土坑 遺物出土状況
- 6 1号土坑 完掘状況
- 7 1号埋甕と丸石
- 8・9 1号埋甕

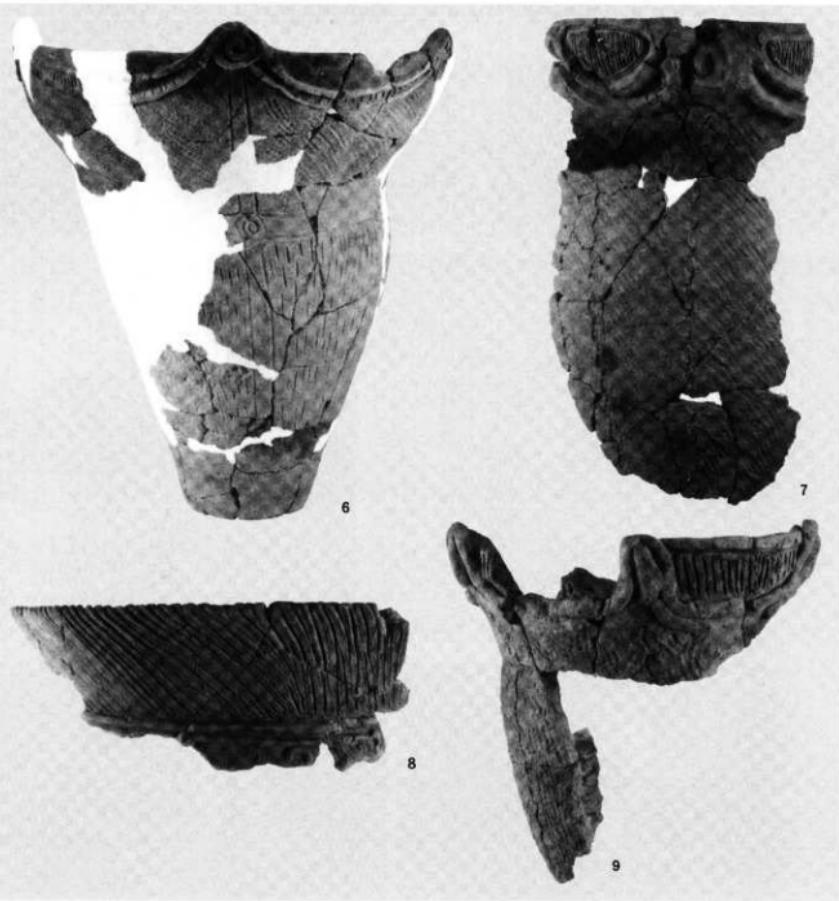


图版 4

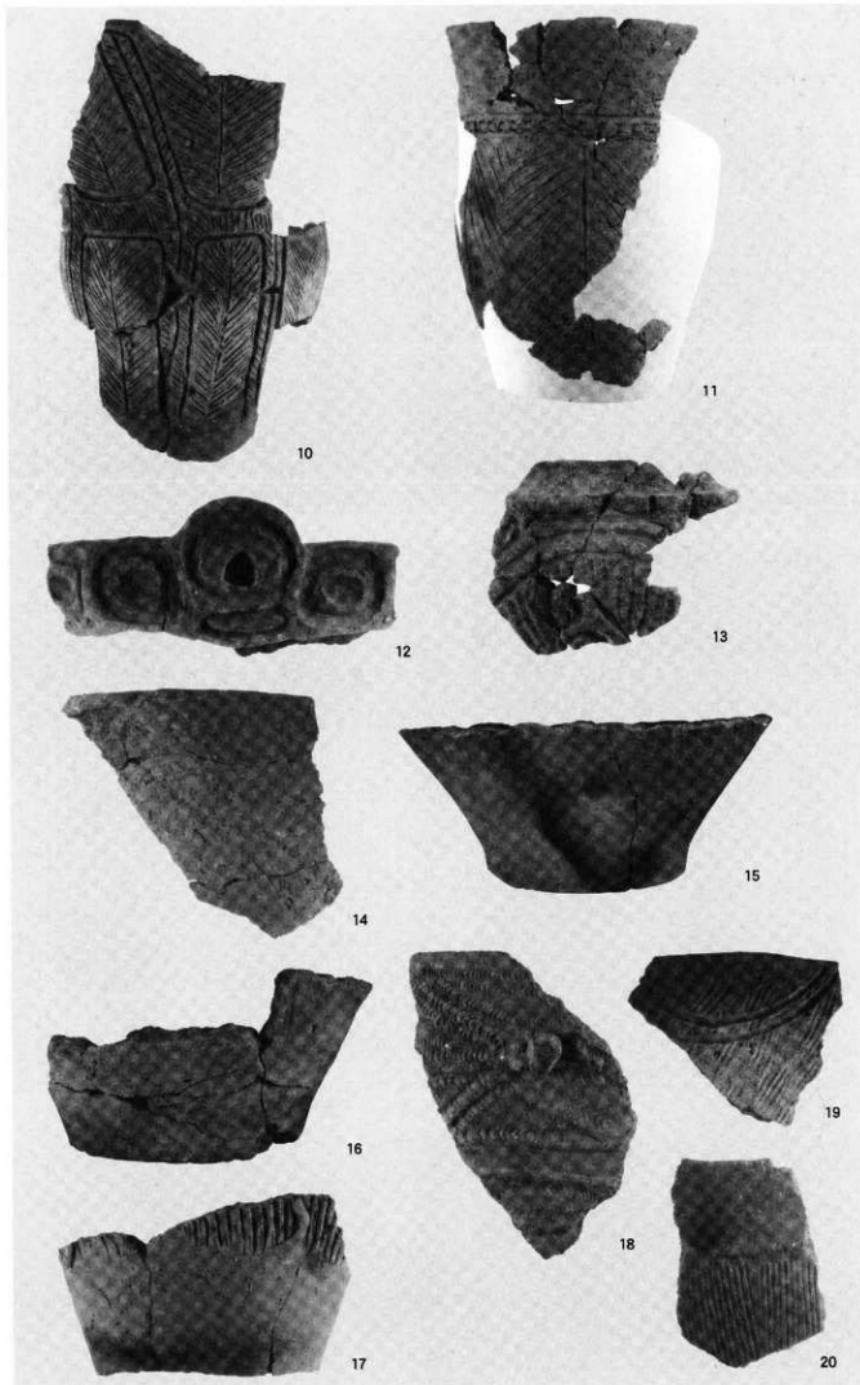
1号竖穴 遗物



2号竖穴 遗物

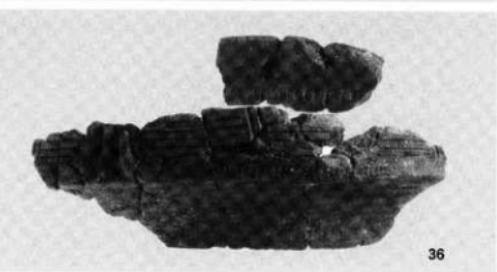
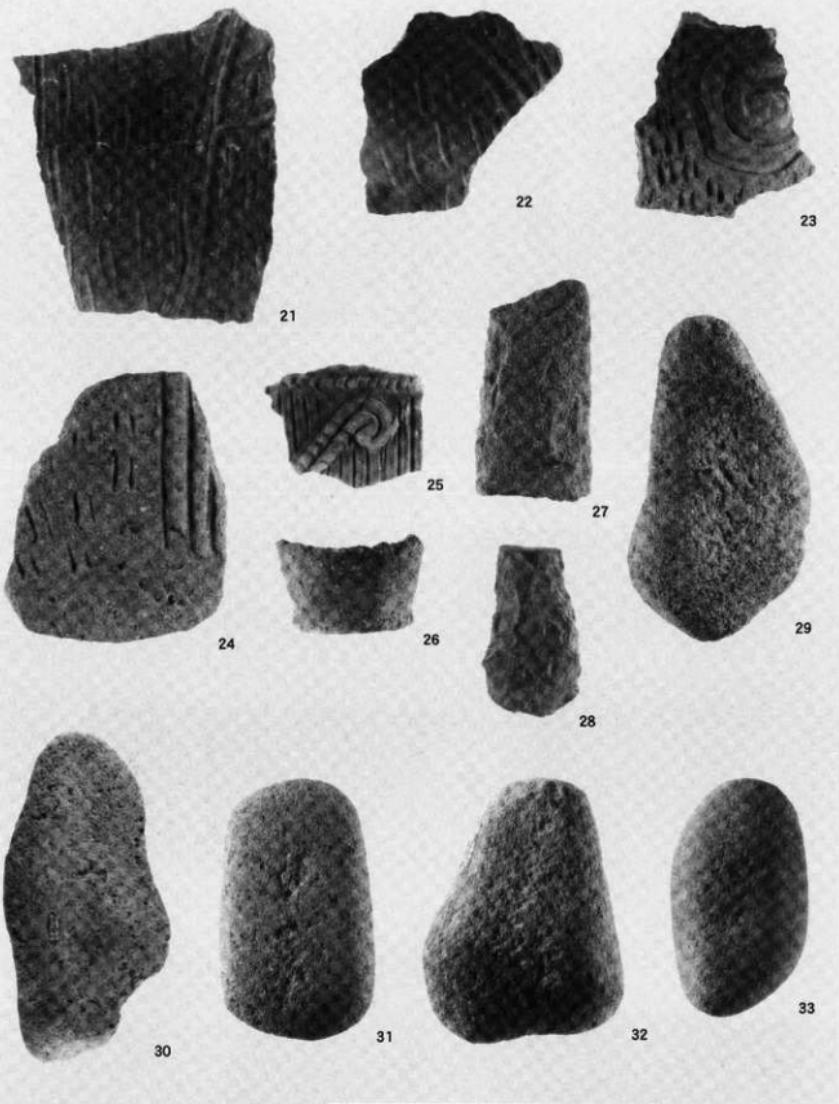


## 2号竪穴 遺物



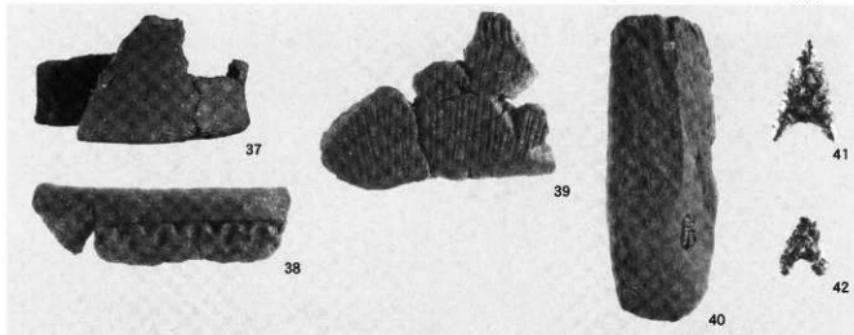
図版 6

2号竪穴 遺物

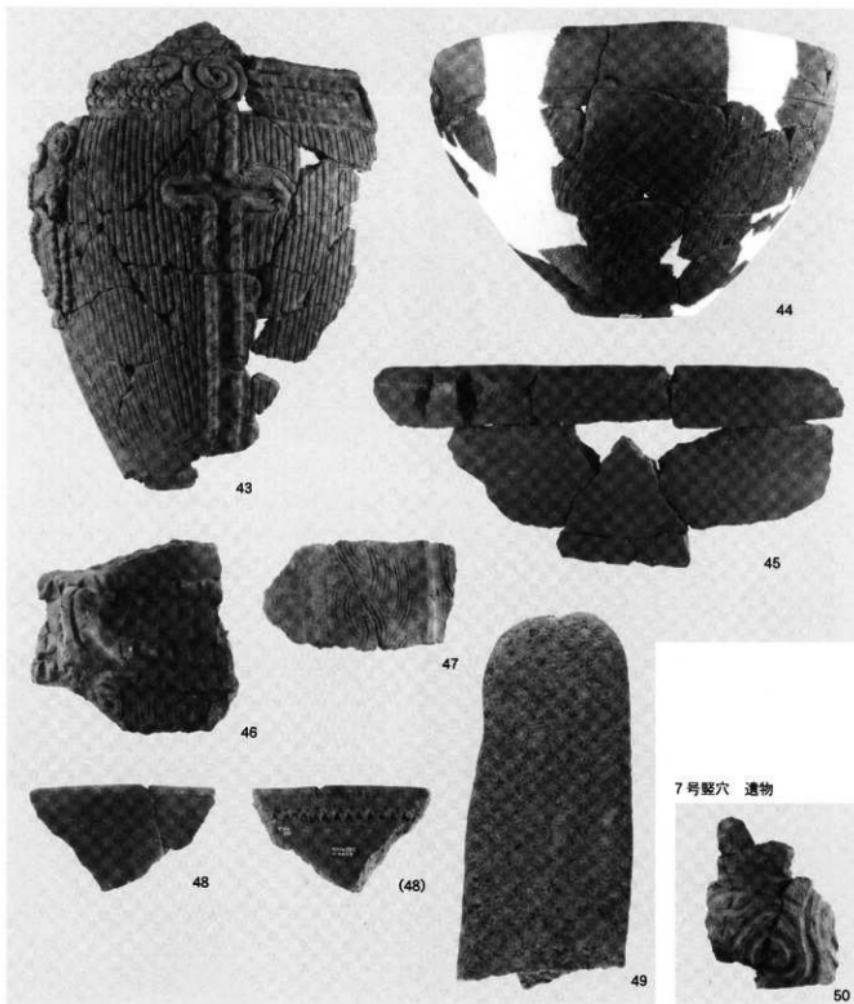


3号竪穴 遺物

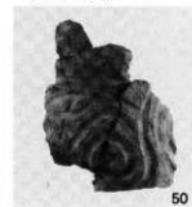
## 3号竖穴 遗物

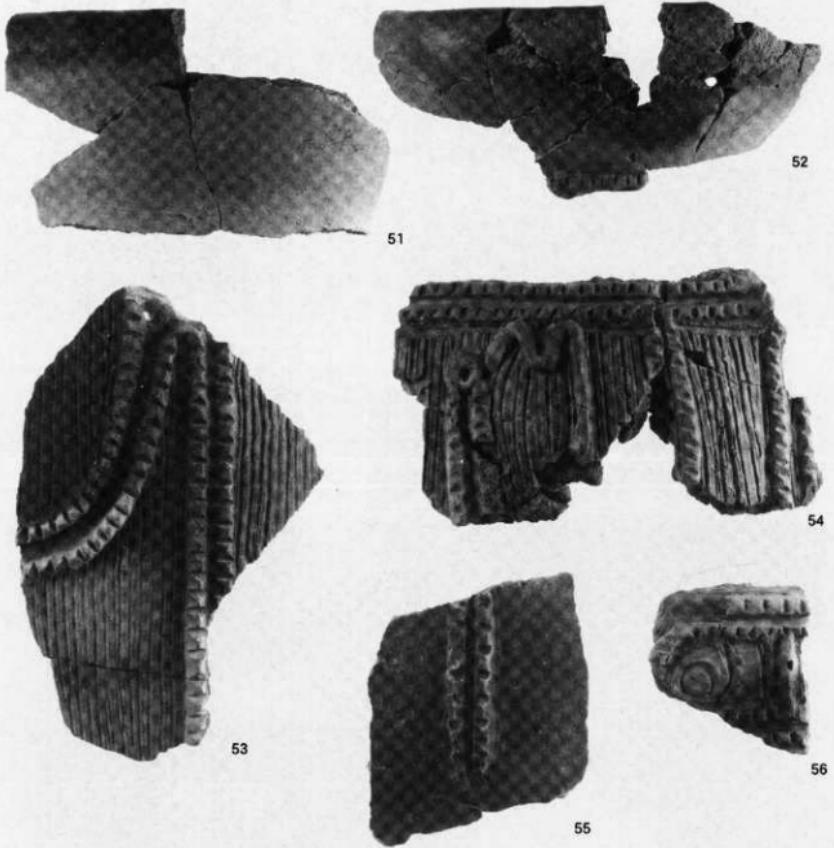


## 4号竖穴 遗物

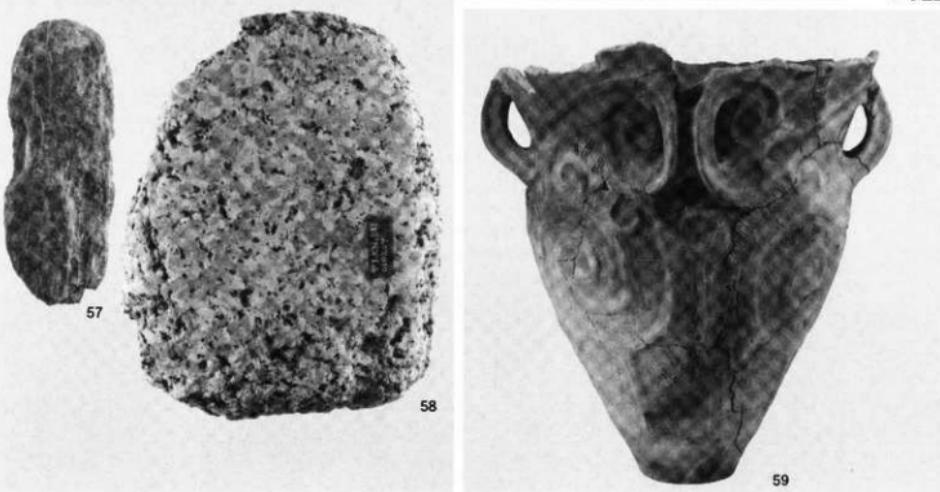


## 7号竖穴 遗物

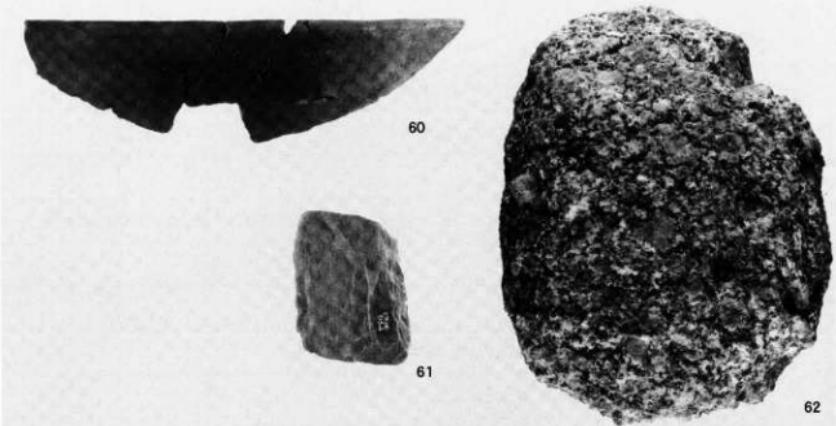




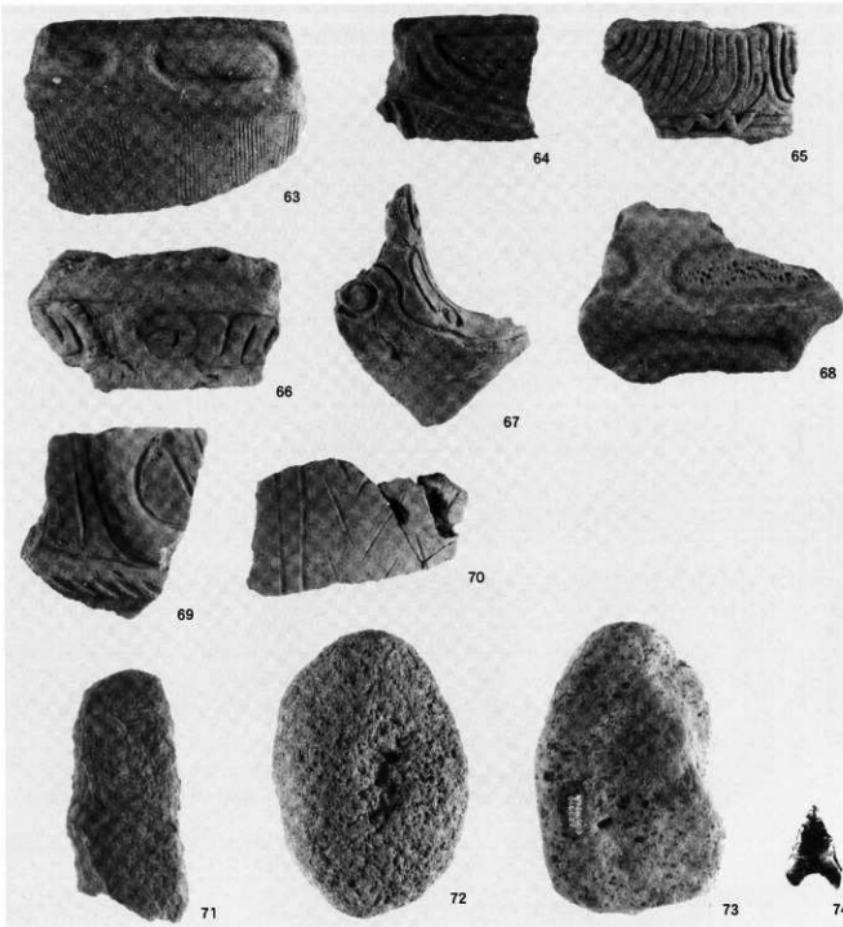
1号埋藏



## 3号竪穴 遺物



## 造模外 遺物



## 柳坪北遺跡 抄録

フリガナ	ヤナギツボキタイセキ	
書名	柳坪北遺跡	
副題	天然ガスパイプライン(甲府ライン)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
シリーズ		
著者名	梯原功一	
発行者名	帝国石油株式会社・柳坪北遺跡発掘調査会	
編集者名	柳坪北遺跡発掘調査会	
住所・電話番号	〒406-0032 山梨県東八代郡石和町四日市場1566 (財)山梨文化財研究所内 TEL 055-263-6441	
印刷所	株エンドレス 〒405-0014 山梨県山梨市上石森123 TEL 0553-22-4574	
発行日	平成14年(2002)3月29日	
柳坪北遺跡	所在地	山梨県北巨摩郡長坂町大八田字柳坪
	25,000分の1 地図名・位置・標高	谷戸・北緯35°50'02" 東経138°23'22"・標高720m
遺跡概要	主な時代	縄文時代中期・古墳時代
	主な遺構	竪穴建物跡5、土坑1、屋外埋甕1
	主な遺物	縄文土器、石器、土師器
	特殊遺構	丸石を伴う屋外埋甕
	特殊遺物	ミニチュア土器、釣手土器、丸石
	調査期間	平成13(2001)年2月13日～3月8日

緯度・経度は旧日本測地系数値を使用

### 柳坪北遺跡

—天然ガスパイプライン(甲府ライン)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年(2002)3月29日 発行

編集 柳坪北遺跡発掘調査会

〒406-0032 山梨県東八代郡石和町四日市場1566 (財)山梨文化財研究所内

印刷 株エンドレス

